

Oracle® Secure Global Desktop

インストールガイド (バージョン 4.6 用)

ORACLE®

Part No. 821-2162-10
2010 年 8 月, Revision 01

Copyright © 2010 Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS プログラム、ソフトウェア、データベース、および米国政府機関顧客に提供された関連ドキュメントと技術データは、適用可能な連邦調達規則と機関固有の補足規則に基づいた「商用コンピュータソフトウェア」または「商用技術データ」です。As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle America, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション（人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む）への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用了ことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

Oracle と Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

AMD、Opteron、AMD ロゴ、AMD Opteron ロゴは、Advanced Micro Devices, Inc. の商標または登録商標です。Intel、Intel Xeon は、Intel Corporation の商標または登録商標です。SPARC のすべての商標は許可を得て使用され、SPARC International, Inc の商標または登録商標です。UNIX は X/Open Company, Ltd. から許可を得た登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。



Please
Recycle



Adobe PostScript

目次

はじめに vii

1. SGD のインストール 1

インストールの準備 2

SGD のメインコンポーネントのインストール 2

▼ SGD のインストール方法 3

Microsoft Windows 対応 SGD 拡張モジュールのインストール 5

▼ Microsoft Windows 対応 SGD 拡張モジュールをインストールする
方法 5

UNIX および Linux プラットフォーム対応 SGD 拡張モジュールのイン
ストール 6

▼ Solaris プラットフォームに SGD 拡張モジュールをインストール
する方法 7

▼ Linux プラットフォームに SGD 拡張モジュールをインストール
する方法 8

Linux プラットフォームへの UNIX オーディオモジュールのインストールに
関するトラブルシューティング 9

SGD Client の手動インストール 9

▼ Microsoft Windows プラットフォームに SGD Client を手動でインストー
ルする方法 10

▼ Solaris OS プラットフォームおよび Linux プラットフォームに SGD
Client を手動でインストールする方法 10

SGD Client を使用したログイン 11

SGD Gateway のインストール 11

2. SGD のアップグレード 13

アップグレードを実行する前に 13

アップグレードと Early Access Program ソフトウェア 13

アップグレードを実行するための条件 13

Solaris OS プラットフォーム上でアップグレードを実行する前に 14

アップグレードと既存の設定 14

アップグレードと UNIX オーディオ 15

アップグレードの実行 16

▼ フルライセンスの単一サーバーアレイをアップグレードする方法 16

▼ フルライセンスの複数サーバーアレイをアップグレードする方法 16

カスタマイズした SGD のインストールのアップグレード 17

カスタマイズ済み SGD Web サーバーファイルのアップグレード 18

カスタマイズ済み SGD サーバーファイルのアップグレード 18

ほかの SGD コンポーネントのアップグレード 20

▼ Microsoft Windows 対応 SGD 拡張モジュールをアップグレードする方法 20

▼ UNIX® および Linux プラットフォーム対応 SGD 拡張モジュールをアップグレードする方法 20

▼ SGD Client を自動的にアップグレードする方法 21

▼ SGD Client を手動でアップグレードする方法 21

▼ SGD Gateway のアップグレード方法 21

3. SGD の概要 23

SGD へのログイン 23

▼ SGD にログインする方法 23

Webtop の使用 26

アプリケーションの実行 27

設定の変更 29

ログアウト	29
SGD 管理ツール	29
Administration Console	30
Administration Console を起動する	30
Administration Console の使用	30
tarantella コマンド	33
ユーザーの作成	34
ユーザープロファイルおよび SGD 管理者の作成	35
▼ ユーザープロファイルを作成する方法	36
▼ SGD 管理者を追加する方法	38
Webtop へのアプリケーションの追加	41
アプリケーションオブジェクトの作成および割り当て	42
▼ アプリケーションサーバーオブジェクトを作成する方法	43
▼ アプリケーションオブジェクトを作成する方法	45
▼ アプリケーションオブジェクトを割り当てる方法	49
SGD の管理	54
アレイ	56
ユーザーの監視	56
ユーザーセッション	57
アプリケーションセッション	57
▼ ユーザーのアプリケーションセッションをシャドウイングする方 法	58
SGD の制御	59
SGD 拡張モジュールの制御	60
Microsoft Windows 対応 SGD 拡張モジュールの制御	60
UNIX および Linux プラットフォーム対応 SGD 拡張モジュールの制御	60
SGD ネットワークアーキテクチャー	61
クライアントデバイス	62

SGD サーバー 62

アプリケーションサーバー 62

次の作業 63

ユーザーに通知する必要がある内容 63

詳細ヘルプの入手場所 64

4. SGD の削除 65

SGD の削除 65

- ▼ SGD を削除する方法 65
- ▼ Microsoft Windows 対応 SGD 拡張モジュールを削除する方法 66
- ▼ UNIX® および Linux プラットフォーム対応 SGD 拡張モジュールを削除する方法 66
- ▼ Microsoft Windows プラットフォームで SGD Client を削除する方法 (手動インストール) 66
- ▼ Microsoft Windows プラットフォームで SGD Client を削除する方法 (自動インストール) 67
- ▼ UNIX、Linux、および Mac OS X プラットフォームで SGD Client を削除する方法 67

はじめに

『 Oracle Secure Global Desktop 4.6 インストールガイド 』には、Oracle Secure Global Desktop (SGD) のインストール、アップグレード、および削除を行うための手順が説明されています。また、このソフトウェアの使用を開始する手順も説明されています。

内容の紹介

第 1 章では、SGD のインストール方法について説明します。

第 2 章では、以前のバージョンの SGD からアップグレードするための要件と手順について説明します。

第 3 章では、SGD にログインしてソフトウェアの使用を開始する方法について説明します。

第 4 章では、SGD の削除方法について説明します。

UNIX コマンドの使用法

このマニュアルには、システムのシャットダウン、システムのブート、デバイスの設定といった基本的な UNIX® のコマンドや手順に関する情報は記載されていない場合があります。このような情報については、次のマニュアルを参照してください。

- 使用しているシステムに付属しているソフトウェアマニュアル
- Solaris™ オペレーティングシステムのマニュアル。次の場所から入手できます。

<http://docs.sun.com>

ただし、それぞれの SGD コマンドに関する情報はこのマニュアルに記載されています。

シェルプロンプト

シェル	プロンプト
C シェル	<i>machine-name%</i>
C シェルスーパーユーザー	<i>machine-name#</i>
Bourne シェルおよび Korn シェル	\$
Bourne シェルおよび Korn シェルスーパーユーザー	#

表記上の規則

字体	意味	使用例
AaBbCc123	コマンド名、ファイル名、およびディレクトリ名を示します。または、画面上のコンピュータ出力を示します。	.login ファイルを編集します。 ls -a を使用してすべてのファイルを表示します。 % You have mail.
AaBbCc123	ユーザーが入力する文字を、画面上のコンピュータ出力とは区別して示します。	% su Password:
AaBbCc123	書名、新規語や新規用語、強調する語句を示します。コマンド行の変数を示します。実際に使用する特定の名前または値で置き換えます。	『ユーザーガイド』の第 6 章を参照してください。 これらはクラスオプションと呼ばれます。 ファイルを削除するには、 rm filename と入力します。

注 - ブラウザの設定によって、文字の表示が異なります。文字が正しく表示されない場合は、使用しているブラウザの文字エンコーディングを Unicode UTF-8 に変更してください。

関連マニュアル

次の表は、この製品に関するマニュアルの一覧を示しています。オンラインマニュアルは、次のサイトで参照できます。

<http://docs.sun.com/app/docs/coll/1706.5>

アプリケーション	タイトル	Part Number	形式	ロケーション
リリースノート	Oracle Secure Global Desktop 4.6 Platform Support and Release Notes	821-1928	HTML PDF	オンライン DVD メディアおよびオンライン
管理	Oracle Secure Global Desktop 4.6 管理者ガイド	821-2167	HTML PDF	オンライン
ユーザー	Oracle Secure Global Desktop 4.6 ユーザーガイド	821-2157	HTML PDF	オンライン
管理	Oracle Secure Global Desktop 4.6 Gateway 管理者ガイド	821-2166	HTML PDF	オンライン

マニュアルのフィードバック

このマニュアルに関するコメントは、<http://docs.sun.com> で Feedback[+] リンクをクリックして送付してください。フィードバックには、次のように、マニュアルのタイトルと Part Number を含めるようにしてください。

Oracle Secure Global Desktop 4.6 インストールガイド、Part Number 821-2162

第1章

SGD のインストール

この章では、Oracle Secure Global Desktop (SGD) のインストール方法について説明します。

SGD には、インストール可能なコンポーネントが複数用意されています。

- ホストにインストールされる SGD のメインコンポーネントは、SGD の主要機能を提供します。
- アプリケーションサーバーにインストールされるオプションコンポーネントは SGD 拡張モジュールと呼ばれ、SGD の追加機能を提供します。たとえば、ユーザーがクライアントデバイスのドライブにアクセスできるようにします。
- クライアントデバイスにインストールされるコンポーネントは、ユーザーが SGD サーバーに接続できるようにします。
- ホストにインストールされるオプションコンポーネントは SGD ゲートウェイと呼ばれ、プロキシサーバーと、SGD サーバーの阵列の負荷分散機能を提供します。

この章の内容は次のとおりです。

- [2 ページの「インストールの準備」](#)
- [2 ページの「SGD のメインコンポーネントのインストール」](#)
- [5 ページの「Microsoft Windows 対応 SGD 拡張モジュールのインストール」](#)
- [6 ページの「UNIX および Linux プラットフォーム対応 SGD 拡張モジュールのインストール」](#)
- [9 ページの「SGD Client の手動インストール」](#)
- [11 ページの「SGD Gateway のインストール」](#)

インストールの準備

SGD をインストールする前に、<http://docs.sun.com/app/docs/doc/821-1928> に用意されている『Oracle Secure Global Desktop 4.6 Platform Support and Release Notes』を参照してください。リリースノートには次の内容が含まれています。

- ハードウェアの要件
- サポートされるプラットフォーム (必要なオペレーティングシステムの変更を含む)
- システムの要件 (必要なユーザーやネットワークポートなど)
- インストールに関する既知の問題

SGD のメインコンポーネントのインストール

Solaris オペレーティングシステム (Solaris OS) プラットフォームの場合は、`pkgadd` コマンドを使用して SGD をインストールします。

Linux プラットフォームの場合は、`rpm` コマンドを使用して SGD をインストールします。

デフォルトでは、SGD は `/opt/tarantella` ディレクトリにインストールされます。インストールディレクトリは、次のようにして変更できます。

- **Solaris OS プラットフォーム** – ソフトウェアのインストール時に、インストールプログラムによってインストールディレクトリの指定が求められます。
- **Solaris 10 OS Trusted Extensions プラットフォーム** – ソフトウェアのインストール時に、インストールプログラムによってインストールディレクトリの指定が求められます。`/opt` ディレクトリは読み取り専用ディレクトリであるため、別のインストールディレクトリを選択する必要があります。また、ラベル付けされたゾーンに SGD をインストールする必要があります。大域ゾーンには SGD をインストールしないでください。
- **Linux プラットフォーム** – ソフトウェアのインストール時に `rpm` コマンドに `--prefix` オプションを使用することで、別のインストールディレクトリを選択できます。

SGD のメインコンポーネントをインストールする際に、SGD Web サーバーをインストールします。SGD インストールプログラムでは、SGD Web サーバーが HTTP 接続を待機する TCP ポートを指定する画面が表示されます。通常、これは TCP ポート 80 です。別のプロセスがこのポート上で待機している場合には、別のポートを選択するように求められます。

SGD をインストールすると、SGD サーバーと SGD Web サーバーが稼働します。

▼ SGD のインストール方法

1. ソフトウェアを入手します。

ソフトウェアを <http://www.oracle.com> からダウンロードするか、インストールメディアからコピーします。

ホスト上の一時ディレクトリにソフトウェアを保存します。

パッケージファイルは次のとおりです。

- `tta-version.sol-x86.pkg` (x86 プラットフォーム版 Solaris OS の場合)
- `tta-version.sol-sparc.pkg` (SPARC® テクノロジプラットフォーム版 Solaris OS の場合)
- `tta-version.i386.rpm` (Linux プラットフォームの場合)

2. ホストにスーパーユーザー (root) としてログインします。

3. SGD をインストールします。

パッケージファイルが圧縮されている場合、インストール前にファイルを解凍する必要があります。

x86 プラットフォーム版 Solaris OS にインストールする場合：

```
# pkgadd -d /tmpdir/tta-version.sol-x86.pkg
```

SPARC テクノロジプラットフォーム版 Solaris OS にインストールする場合：

```
# pkgadd -d /tmpdir/tta-version.sol-sparc.pkg
```

注 - Solaris OS プラットフォームでは、「`pwd: cannot determine current directory!`」というエラーメッセージが表示されてインストールが失敗した場合は、`/tmpdir` ディレクトリに移動して、インストールを再度実行してください。

Linux プラットフォームにインストールする場合：

```
# rpm -Uvh /tmpdir/tta-version.i386.rpm
```

4. SGD パッケージがパッケージデータベースに登録されていることを確認します。

Solaris OS プラットフォームの場合：

```
# pkginfo -x tta
```

Linux プラットフォームの場合：

```
# rpm -q tta
```

5. SGD サーバーを起動します。

```
# /opt/tarantella/bin/tarantella start
```

SGD サーバーの初回起動時には、SGD インストールプログラムが実行されます。このプログラムは次のことを行います。

- ソフトウェアライセンス契約書への同意をユーザーに求めます。
- 推奨される設定の一覧を提示します。ユーザーは、それを受け入れることも変更することもできます。次の設定があります。
 - **TCP ポート。** TCP (Transmission Control Protocol) ポート 80 で別のプロセスが実行されている場合は、SGD インストールプログラムによって SGD Web サーバーに使用する TCP ポートの指定が求められます。
 - **ピア DNS 名。** 完全指定のドメイン名システム (DNS) 名を使用する必要があります。ファイアウォールを備えたネットワークで SGD を実行する場合は、ファイアウォールの内側でホストが認識されている DNS 名を使用します。
- ソフトウェアをインストールおよび設定します。これには、いくつかのサンプルアプリケーションで使用する組織階層の作成、および UNIX® システムまたは Linux システムの root ユーザーを SGD 管理者にする処理が含まれます。
- システム起動ディレクトリにファイルを追加して、システムの再起動時に SGD サーバーおよび SGD Web サーバーが確実に起動するようにします。たとえば、ソフトウェアを実行レベル 3 でインストールする場合、このファイルは /etc/rc3.d ディレクトリに置かれ、ファイル名は *sun.com-sgd-base になります。
- root の crontab を変更して、SGD ログファイルを毎週アーカイブするようにします。
- Linux プラットフォームの場合のみ、SGD PAM (Pluggable Authentication Module) 構成ファイル /etc/pam.d/tarantella を追加します。これは、既存の /etc/pam.d/passwd ファイルからコピーされます。このファイルが存在しない場合、PAM 構成ファイルは作成されません。
- ログファイル /tmp/tta_inst.log を作成します。このファイルには、インストール中に表示されたメッセージのコピーが格納されます。

Microsoft Windows 対応 SGD 拡張モジュールのインストール

Microsoft Windows 対応 SGD 拡張モジュールには、高度な負荷分散およびシームレスウィンドウ用のモジュールが含まれます。拡張モジュールをインストールする際、これらのモジュールのどれをインストールするかを選択できます。

デフォルトでは、拡張モジュールは `C:\Program Files\Oracle\Enhancement Module` ディレクトリにインストールされますが、インストールプログラムによってインストールディレクトリの指定が求められます。

インストール後、負荷分散サービスが稼働します。負荷分散サービスは、Windows ホストがリブートされるたびに自動的に開始されます。

▼ Microsoft Windows 対応 SGD 拡張モジュールをインストールする方法

1. 管理者特権を持つユーザーで Windows ホストにログインします。
2. ホスト上の一時ディレクトリに、拡張モジュールインストールプログラムを保存します。

インストールメディアからインストールする場合、インストールプログラムは `modules` ディレクトリにあります。

あるいは、`http://server.example.com` の SGD Web サーバーからインストールプログラムをダウンロードします。ここで、`server.example.com` は SGD サーバーの名前です。SGD Web サーバーの開始画面が表示されたら、「Oracle Secure Global Desktop 拡張モジュールのインストール」をクリックします。

SGD 拡張モジュールインストールプログラムは `temwin32.exe` です。

3. SGD 拡張モジュールをインストールします。

`temwin32.exe` をダブルクリックし、画面に表示される指示に従います。

UNIX および Linux プラットフォーム対応 SGD 拡張モジュールのインストール

UNIX および Linux プラットフォーム対応 SGD 拡張モジュールには、高度な負荷分散、CDM、および UNIX オーディオ用のモジュールが含まれます。

拡張モジュールの UNIX オーディオモジュールはオプションであり、デフォルトではインストールされません。UNIX オーディオモジュールのインストールを選択する場合は、SGD オーディオドライバがオペレーティングシステムのカーネルにインストールされます。

Solaris OS プラットフォームの場合、UNIX オーディオモジュールは大域ゾーンにのみインストールできます。

Linux プラットフォームの場合、SGD オーディオドライバはカーネルにインストールされる前にコンパイルされます。オーディオドライバをコンパイルするために、ホストで次のものが使用可能になっている必要があります。

- 使用している Linux カーネルのバージョンに対応するヘッダーファイル
- GNU Compiler Collection (GCC)
- make ユーティリティ
- soundcore カーネルモジュール

Solaris OS プラットフォームの場合、pkgadd コマンドを使用して拡張モジュールをインストールします。

Linux プラットフォームの場合、rpm コマンドを使用して拡張モジュールをインストールします。

デフォルトでは、拡張モジュールは /opt/tta_tem ディレクトリにインストールされます。インストールディレクトリは、次のようにして変更できます。

- **Solaris OS プラットフォーム** – ソフトウェアのインストール時に、インストールプログラムによってインストールディレクトリの指定が求められます。
- **Solaris 10 OS Trusted Extensions プラットフォーム** – ソフトウェアのインストール時に、インストールプログラムによってインストールディレクトリの指定が求められます。/opt ディレクトリは読み取り専用ディレクトリであるため、別のインストールディレクトリを選択する必要があります。また、ラベル付けされたゾーンに拡張モジュールをインストールする必要があります。大域ゾーンには拡張モジュールをインストールしないでください。
- **Linux プラットフォーム** – ソフトウェアのインストール時に rpm コマンドに --prefix オプションを使用することで、別のインストールディレクトリを選択できます。

インストール後、高度な負荷分散モジュールおよび UNIX オーディオモジュール (選択した場合) が稼働します。CDM モジュールは追加の設定を必要とするため、稼働しません。必要な追加の設定については、『Oracle Secure Global Desktop 4.6 管理者ガイド』を参照してください。

拡張モジュールインストールプログラムは、システム起動ディレクトリにファイルを追加して、システムの再起動時に拡張モジュールが確実に起動するようにします。たとえば、ソフトウェアを実行レベル 3 でインストールする場合、このファイルは /etc/rc3.d ディレクトリに置かれ、ファイル名は *sun.com-sgd-em になります。

▼ Solaris プラットフォームに SGD 拡張モジュールをインストールする方法

1. ホスト上の一時ディレクトリに SGD 拡張モジュールを保存します。

インストールメディアからインストールする場合、パッケージは modules ディレクトリにあります。

あるいは、<http://server.example.com> の SGD Web サーバーからインストールプログラムをダウンロードします。ここで、server.example.com は SGD サーバーの名前です。SGD Web サーバーの開始画面が表示されたら、「Oracle Secure Global Desktop 拡張モジュールのインストール」をクリックします。

パッケージファイルは次のとおりです。

- `tem-version.sol-x86.pkg` (x86 プラットフォーム版 Solaris OS の場合)
- `tem-version.sol-sparc.pkg` (SPARC テクノジプラットフォーム版 Solaris OS の場合)

ここで、`version` は SGD のバージョン番号です。

2. ホストにスーパーユーザー (root) としてログインします。

3. SGD 拡張モジュールをインストールします。

パッケージファイルが圧縮されている場合、インストール前にファイルを解凍する必要があります。

x86 プラットフォーム版 Solaris OS にインストールする場合：

```
# pkgadd -d /tmpdir/tem-version.sol-x86.pkg
```

SPARC テクノジプラットフォーム版 Solaris OS にインストールする場合：

```
# pkgadd -d /tmpdir/tem-version.sol-sparc.pkg
```

インストール時に、拡張モジュールインストールプログラムは次の設定を提示します。ユーザーは、それを受け入れることも変更することもできます。

- インストールディレクトリ。
 - ホストが持っている仮想メモリーの容量。これは負荷分散に使用されます。
 - UNIX オーディオモジュールをインストールするかどうか。
4. 拡張モジュールパッケージがパッケージデータベースに登録されていることを確認します。

```
# pkginfo -x tem
```

▼ Linux プラットフォームに SGD 拡張モジュールをインストールする方法

1. ホスト上の一時ディレクトリに SGD 拡張モジュールを保存します。

インストールメディアからインストールする場合、パッケージは `modules` ディレクトリにあります。

あるいは、`http://server.example.com` の SGD Web サーバーからインストールプログラムをダウンロードします。ここで、`server.example.com` は SGD サーバーの名前です。SGD Web サーバーの開始画面が表示されたら、「Oracle Secure Global Desktop 拡張モジュールのインストール」をクリックします。

パッケージファイルは、`tem-version.i386.rpm` です。ここで、`version` は SGD のバージョン番号です。

2. ホストにスーパーユーザー (`root`) としてログインします。
3. SGD 拡張モジュールをインストールします。

```
# rpm -Uvh tem-version.i386.rpm
```

4. 拡張モジュールパッケージがパッケージデータベースに登録されていることを確認します。

```
# rpm -q tem
```

5. 拡張モジュールインストールプログラムを起動します。

```
# /opt/tda_tem/bin/tem start
```

6. 拡張モジュールの設定を行います。

拡張モジュールインストールプログラムは次の設定を提示します。ユーザーは、それを受け入れることも変更することもできます。

- ホストが持っている仮想メモリーの容量。これは負荷分散に使用されます。
- UNIX オーディオモジュールをインストールするかどうか。

Linux プラットフォームへの UNIX オーディオモジュールのインストールに関するトラブルシューティング

Linux プラットフォームでは、UNIX オーディオモジュールがインストールされない場合、SGD 拡張モジュールインストールプログラムはユーザーにインストールを取り消すか、UNIX オーディオモジュールをインストールせずにインストールを続行するかを尋ねます。UNIX オーディオモジュールがインストールされない場合は、次のことを確認してください。

- 使用している Linux カーネルのバージョンに対応するヘッダーファイルがインストールされているかどうか。
- ヘッダーファイルと Linux カーネルのバージョン番号が一致しているかどうか。
- GCC のバージョンが、Linux カーネルのコンパイルに使用されたバージョンと一致しているかどうか。
- dmesg ユーティリティでほかのエラーが表示されるかどうか。
- 使用している環境で ARCH 環境変数が設定されている場合、システムに存在するディレクトリのパスがそれに含まれるかどうか。

SGD Client の手動インストール

SGD Client は通常、Java™ テクノロジーを有効にしたブラウザを使ってユーザーが SGD サーバーに接続すると、自動的にインストールされます。SGD Client を手動でインストールする場合にだけ、この節で説明する手順に従ってください。

Microsoft Windows プラットフォームで SGD Client をインストールするには、管理者権限が必要です。

Microsoft Windows プラットフォームの場合、SGD Client はデフォルトでは C:\Program Files\Sun\Secure Global Desktop Client ディレクトリにインストールされますが、ソフトウェアのインストール時に別のインストールディレクトリを選択できます。SGD Client のショートカットが Windows 「スタート」メニューに追加されます。

UNIX プラットフォームと Linux プラットフォームの場合、SGD Client はデフォルトでは \$HOME/bin ディレクトリにインストールされますが、ソフトウェアのインストール時に別のインストールディレクトリを選択できます。

注 - Mac OS X クライアントプラットフォームでは、手動インストールを行うことができません。

▼ Microsoft Windows プラットフォームに SGD Client を手動でインストールする方法

1. ブラウザで、SGD Web サーバーにアクセスします。

たとえば、`http://server.example.com` です。ここで、`server.example.com` は SGD サーバーの名前です。

SGD Web サーバーの開始画面が表示されます。

2. (省略可能) 使用する言語を選択します。

言語リストから言語を選択します。

開始画面が選択した言語で表示されます。

3. 「Oracle Secure Global Desktop Client のインストール」をクリックします。

「Oracle Secure Global Desktop Client」ページが表示されます。

4. SGD Client インストールプログラムをダウンロードします。

「Secure Global Desktop Client for Microsoft Windows のダウンロード」をクリックします。

PC 上の一時ディレクトリにインストールプログラムを保存します。

SGD Client インストールプログラムは `sgdcwin-lang.exe` です。

5. 一時ディレクトリに移動し、SGD Client をインストールします。

`sgdcwin-lang.exe` をダブルクリックし、画面に表示される指示に従います。

▼ Solaris OS プラットフォームおよび Linux プラットフォームに SGD Client を手動でインストールする方法

1. ブラウザで、SGD Web サーバーにアクセスします。

たとえば、`http://server.example.com` です。ここで、`server.example.com` は SGD サーバーの名前です。

SGD Web サーバーの開始画面が表示されます。

2. (省略可能) 使用する言語を選択します。

言語リストから言語を選択します。

開始画面が選択した言語で表示されます。

3. 「Oracle Secure Global Desktop Client のインストール」をクリックします。

「Oracle Secure Global Desktop Client」ページが表示されます。

4. SGD Client の tar ファイルをダウンロードします。

「*platform* 版の Secure Global Desktop Client」をクリックします。

ホスト上の一時ディレクトリに tar ファイルを保存します。

tar ファイルの名前は、次のようにプラットフォームを示しています。

- sgdcis3so.tar (x86 プラットフォーム版 Solaris OS の場合)
- sgdcspso.tar (SPARC テクノロジプラットフォーム版 Solaris OS の場合)
- sgdcis3li.tar (Linux プラットフォームの場合)

5. 一時ディレクトリに移動し、tar ファイルを展開します。

```
$ cd /tmpdir
$ tar xvf tarfile
```

6. SGD Client をインストールします。

```
$ sh sgdc/install
```

画面に表示される指示に従ってください。

SGD Client を使用したログイン

- UNIX プラットフォームと Linux プラットフォームの場合は、SGD Client を `ttatcc` コマンドで起動します。
- Microsoft Windows プラットフォームの場合は、Client をインストールの一部として起動するか、「スタート」→「プログラム」→「Oracle Secure Global Desktop」→「ログイン」の順にクリックして起動します。

SGD Client の初回起動時に、次の情報を入力するよう求められます。

- 接続先の SGD サーバーの URL (Uniform Resource Locator)。これは通常、`http://server.example.com/sgd` です。ここで、`server.example.com` は SGD サーバーの名前です。
- 使用するプロキシ設定。この設定は、デフォルトのブラウザ (Java テクノロジが有効な場合) から設定を引き継ぐことも、自分で設定を入力することもできます。

SGD Gateway のインストール

SGD Gateway のインストールと設定の手順については、<http://docs.sun.com/app/docs/doc/821-1924> で参照可能な『Oracle Secure Global Desktop 4.6 Gateway 管理者ガイド』で説明されています。

第2章

SGD のアップグレード

この章では、以前のバージョンの Oracle Secure Global Desktop (SGD) からアップグレードするための要件と手順について説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- 13 ページの「アップグレードを実行する前に」
- 16 ページの「アップグレードの実行」
- 20 ページの「ほかの SGD コンポーネントのアップグレード」

アップグレードを実行する前に

ここでは、アップグレードを実行する前に必要となる知識と作業について説明します。

アップグレードと Early Access Program ソフトウェア

SGD の Early Access Program (EAP) ソフトウェアリリースへのアップグレード、および EAP ソフトウェアリリースからのアップグレードはサポートされていません。EAP ソフトウェアリリースは、常に新規インストールを実行する必要があります。

アップグレードを実行するための条件

このバージョンの SGD へのサポートされているアップグレードパスは、<http://docs.sun.com/app/docs/doc/821-1928> で参照可能な『Oracle Secure Global Desktop 4.6 Platform Support and Release Notes』に一覧表示されています。

他のバージョンの SGD からアップグレードする場合は、Oracle サポートまでお問い合わせください。

サポートされていないアップグレードを実行する場合は、新しいバージョンのソフトウェアをインストールする前に、空ファイル `/opt/tarantella/var/UPGRADE` を作成する必要があります。SGD インストールは正しくアップグレードされない場合があります。

Solaris OS プラットフォーム上でアップグレード を実行する前に

Solaris™ オペレーティングシステム (Solaris OS) プラットフォームでアップグレードを実行する場合、`pkgadd` コマンドはパッケージをインストールする前にいくつかのチェックを行い、ユーザーに変更についての確認を求めます。`pkgadd` に指示を与える管理ファイルを作成して、これらのチェックを省略し、ユーザーに確認せずにパッケージをインストールすることもできます。

ユーザーの対話的操作を回避するには、管理ファイルに次の行を含める必要があります。

```
conflict=nocheck
instance=unique
```

SGD をアップグレードする際に、`pkgadd -a adminfile` コマンドを使用して管理ファイルを指定します。

アップグレードを実行する際に管理ファイルを指定しないと、SGD インストールプログラムによって管理ファイルが作成されます。また、`pkgadd` コマンドを `-a adminfile` オプション付きで再度実行できるように、インストールを終了するオプションが提供されます。

アップグレードと既存の設定

アップグレードを実行すると、既存の設定に次の変更が適用されます。

- 既存の Enterprise Naming System (ENS) データベースが保持され、バックアップされます。

ENS データベースは、SGD 組織階層内の全オブジェクトの格納領域です。

`/opt/tarantella/var/ens` ディレクトリが
`/opt/tarantella/var/ens.olderversion` ディレクトリにバックアップされます。

このバックアップは変更されません。既存の ENS データベースが変更される可能性があるのは、それを新しいバージョンの SGD で動作できるようにするためにいくつかの変更が必要となる場合です。

- SGD サーバー設定と SGD グローバル設定が保持されます。ただし、バックアップはされません。

この設定は、`/opt/tarantella/var/serverconfig` ディレクトリに格納されています。

この設定が変更されるのは、新しいプロパティファイルを追加したり、既存のプロパティに新しい属性を追加したりする必要がある場合だけです。

- `/opt/tarantella/var/serverresources` ディレクトリ内のすべてのサーバーリソースファイルが置換されます。

これらのファイルは SGD の動作を制御するので、通常は編集されません。

- SGD ログインスクリプトが保持され、バックアップされます。

`/opt/tarantella/var/serverresources/expect` ディレクトリが
`/opt/tarantella/var/serverresources/expect.oldversion` ディレクトリ
にバックアップされます。

- カスタマイズ済み SGD ファイルがバックアップされます。ただし、アップグレードはされません。

標準インストールに含まれるファイル (*Webtop* テーマなど) を変更するか、ユーザー独自のファイル (ログインスクリプトなど) を追加する方法で、SGD をカスタマイズすることができます。

これらのファイルは手動でアップグレードする必要があります。

SGD の新しいバージョンのインストール時に、手動アップグレードが必要な可能性のあるファイルが存在する場合、インストールプログラムにより警告が表示されます。これらのファイルのアップグレード方法については、[17 ページの「カスタマイズした SGD のインストールのアップグレード」](#)を参照してください。

アップグレードと UNIX オーディオ

アップグレードに従って、X アプリケーションのオーディオを使用する場合は、UNIX または Linux プラットフォームアプリケーションサーバー上の SGD 拡張モジュールもアップグレードする必要があります。アップグレードの手順については、[“UNIX® および Linux プラットフォーム対応 SGD 拡張モジュールをアップグレードする方法” on page 20](#) を参照してください。

SGD と SGD 拡張モジュールのバージョンが異なる場合は、UNIX オーディオサービスが正しく動作しないことがあります。

アップグレードの実行

SGD のアップグレード方法は、単一サーバーアレイをアップグレードするのか複数サーバーアレイをアップグレードするのによって異なります。SGD をカスタマイズした場合は、カスタマイズしたファイルの手動アップグレードが必要になることもあります。

▼ フルライセンスの単一サーバーアレイをアップグレードする方法

1. 中断中のセッションも含めて、アレイ内で実行中のユーザーセッションやアプリケーションセッションがないことを確認します。
2. 新しいバージョンの SGD をインストールしてサーバーをアップグレードします。

▼ フルライセンスの複数サーバーアレイをアップグレードする方法

複数サーバーアレイ内のすべての SGD サーバーは、同じバージョンの SGD ソフトウェア上で実行する必要があります。このため、アレイをアップグレードする場合は、アレイを解除してサーバーを個別にアップグレードしてから、アレイを再構築する必要があります。

1. 中断中のセッションも含めて、アレイ内で実行中のユーザーセッションやアプリケーションセッションがないことを確認します。
2. アレイを解除します。

プライマリ SGD サーバー上で次のコマンドを実行して、セカンダリ SGD サーバーをアレイから切り離します。

```
# tarantella array detach --secondary server
```

セカンダリ SGD サーバーは、一度に 1 つずつ切り離してください。アレイの構造に変更を加えた場合は、その変更がアレイ内のすべての SGD サーバーにコピーされるのを待ってから、次の変更を行うようにしてください。アレイの状態を確認するには、プライマリ SGD サーバー上で `tarantella status` コマンドを実行します。

セカンダリ SGD サーバーはアレイから切り離されるとライセンスキーを失います。そのため、一時的にこのホストの SGD にログインできなくなる場合があります。

3. 新しいバージョンのソフトウェアをインストールしてプライマリ SGD サーバーをアップグレードします。
4. 新しいバージョンのソフトウェアをインストールしてセカンダリ SGD サーバーをアップグレードします。
5. アレイを再構築します。

すべての SGD サーバー上のクロックは同期している必要があります。時間差が 1 分を超えている場合、アレイの連結操作は失敗します。

プライマリ SGD サーバー上で次のコマンドを実行して、セカンダリ SGD サーバーをアレイに追加します。

```
# tarantella array join --secondary server
```

セカンダリ SGD サーバーは、一度に 1 つずつ追加してください。アレイの構造に変更を加えた場合は、その変更がアレイ内のすべての SGD サーバーにコピーされるのを待ってから、次の変更を行うようにしてください。アレイの状態を確認するには、プライマリ SGD サーバー上で `tarantella status` コマンドを実行します。

セカンダリ SGD サーバーはアレイに追加されると、プライマリ SGD サーバーにインストールされているすべてのライセンスキーを取得します。

カスタマイズした SGD のインストールのアップグレード

アップグレード時に、SGD インストールプログラムは検出したカスタマイズ済みファイルを保持しますが、それらのアップグレードは行いません。これらのファイルは手動でアップグレードする必要があります。アップグレードが必要な可能性があるのは、次の 2 セットのファイルです。

- **SGD Web サーバーファイル** – Web アプリケーションファイル、および SGD Web サーバーの設定に使用されるファイル
- **SGD サーバーファイル** – SGD サーバーで使われるファイル (ログインスクリプトなど)

アップグレードの完了後に、次の 2 種類のカスタマイズされたファイルに注意を払う必要があります。

- **カスタマイズ済みファイル** – 標準の SGD インストールに含まれるファイルのうち、SGD 管理者により変更されたもの
- **ビスポークファイル** – ユーザーの組織が作成し、SGD インストールに追加したファイル

カスタマイズ済み SGD Web サーバーファイルのアップグレード

アップグレード時に、SGD インストールプログラムは、検出したすべてのカスタマイズ済み SGD Web サーバーファイルをバックアップします。バックアップされたファイルとその場所のリストは、
`/opt/tarantella/var/log/webservercustomized.list` ログファイルに記録されます。

カスタマイズ済みファイルをアップグレードするには、`diff` や `patch` などのユーティリティを使用して、バックアップされたファイルと標準の SGD インストールに含まれるファイルを比較し、相違点をマージします。

SGD インストールプログラムは、検出したすべてのビズポーク SGD Web サーバーファイルを新しいインストールにコピーします。これらのファイルは変更されません。

カスタマイズ済み SGD サーバーファイルのアップグレード

アップグレード時に、SGD インストールプログラムは、検出したカスタマイズ済み SGD サーバーファイルおよびビズポーク SGD サーバーファイルをバックアップし、次のログファイルを生成します。

- `/opt/tarantella/var/log/upgraded.files` – 変更内容の要約
- `/opt/tarantella/var/log/customized.list` – 管理者が編集または追加したファイルのリスト
- `/opt/tarantella/var/log/customizedchanged.list` – アップグレードによって変更され、管理者が編集したファイルのリスト
- `/opt/tarantella/var/log/docrootjava.log` – 元のインストールに新規追加されたか、元のインストールから変更された Java™ テクノロジファイルのリスト

これらのログファイルを使用して、手動でアップグレードする必要のあるファイルを特定します。

▼ カスタマイズ済み SGD サーバーファイルを手動でアップグレードする方法

1. カスタマイズ済みファイルのコピーを作成します。
2. SGD のバージョン間での変更内容を特定します。

`customizedchanged.list` ログファイルには、手動でアップグレードする必要のある、カスタマイズ済みファイルのリストが含まれています。このログファイルにリスト出力されるファイルごとに、システムには次の 3 つのバージョンが保持されています。

- 古いカスタマイズ済みのバージョン。次のディレクトリのいずれかに格納されています。
 - `/opt/tarantella/var/serverresources.oldversion` - ログインスクリプト用。
 - `/opt/tarantella/etc/data.oldversion` - カラーマップなどその他のファイル用。
- 古いカスタマイズされていないバージョン。
`/opt/tarantella/etc/templates.oldversion` ディレクトリ内に格納されています。
- 新しいカスタマイズされていないバージョン。
`/opt/tarantella/etc/templates` ディレクトリ内に格納されています。

`diff` などのユーティリティーを使用して、カスタマイズされていない古いファイルを、カスタマイズされていない新しいファイルと比較します。これで、SGD のバージョン間での変更内容がわかります。

3. 変更内容をカスタマイズ済みファイルに適用します。

`patch` などのユーティリティーを使用して、[Step 2](#) で特定した変更内容をカスタマイズ済みファイルのコピーに適用します。

4. アップグレードしたカスタマイズ済みファイルを、新しい SGD インストールの正しい場所にコピーします。

▼ ビスボーク SGD サーバーファイルを手動でアップグレードする方法

1. ビスボークファイルのコピーを作成します。

2. SGD のバージョン間での変更内容を特定します。

`docrootjava.log` および `customized.list` ログファイルには、手動アップグレードが必要な可能性のあるビスボークファイルのリストが含まれています。

ビスボークファイルをアップグレードする唯一の方法は、標準 SGD ファイルをバージョン間で比較して変更内容を特定し、それらの変更をビスボークファイルに適用することです。

`diff` などのユーティリティーを使用して、カスタマイズされていない古いファイルを、カスタマイズされていない新しいファイルと比較します。これで、SGD のバージョン間での変更内容がわかります。

変更内容を特定するには、次のファイルを比較します。

- 旧バージョンの標準 SGD ファイル。
`/opt/tarantella/etc/templates.oldversion` ディレクトリ内に格納されています。
- 新バージョンの標準 SGD ファイル。
`/opt/tarantella/etc/templates` ディレクトリ内に格納されています。

3. 変更内容をビスボークファイルに適用します。

patch などのユーティリティーを使用して、手順 2 で特定した変更内容をビスボークファイルのコピーに適用します。

4. アップグレードしたビスボークファイルを、新しい SGD インストールの正しい場所にコピーします。

ほかの SGD コンポーネントのアップグレード

ここでは、SGD 拡張モジュール、SGD Client、および SGD Gateway のアップグレード方法について説明します。

▼ Microsoft Windows 対応 SGD 拡張モジュールをアップグレードする方法

- 新しいバージョンの SGD 拡張モジュールをインストールします。

5 ページの「[Microsoft Windows 対応 SGD 拡張モジュールをインストールする方法](#)」を参照してください。

▼ UNIX® および Linux プラットフォーム対応 SGD 拡張モジュールをアップグレードする方法

SGD 拡張モジュールをアップグレードして、UNIX オーディオモジュールをインストールすると、UNIX オーディオモジュールがすでに実行中であることを示すメッセージが表示されることがあります。このメッセージが表示されるのは、SGD オーディオドライバが現在使用中であり、停止することができないからです。アップグレードされた SGD オーディオドライバは、次回ホストを再起動したときにロードされます。

- 新しいバージョンの拡張モジュールをインストールします。

6 ページの「[UNIX および Linux プラットフォーム対応 SGD 拡張モジュールのインストール](#)」を参照してください。

▼ SGD Client を自動的にアップグレードする方法

SGD Client を自動的にアップグレードできるのは、次の条件を両方満たしている場合だけです。

- 以前のバージョンの SGD Client が自動的にインストールされた
- ユーザーのブラウザに、サポートされている Java™ プラグインツールがあり、Java テクノロジーが有効になっている

1. 既存のブラウザセッションをすべて終了します。
2. 新しいブラウザセッションを開始します。
3. SGD にログインします。

23 ページの「[SGD にログインする方法](#)」を参照してください。

▼ SGD Client を手動でアップグレードする方法

以前のバージョンの SGD Client を手動でインストールした場合のみ、ここで説明する手順に従ってください。

- 新しいバージョンの SGD Client をインストールします。
9 ページの「[SGD Client の手動インストール](#)」を参照してください。

▼ SGD Gateway のアップグレード方法

- 新しいバージョンの SGD Gateway をインストールします。
SGD Gateway のインストールと設定の手順については、
<http://docs.sun.com/app/docs/doc/821-1924> で参照可能な『Oracle Secure Global Desktop 4.6 Gateway 管理者ガイド』で説明されています。

第3章

SGD の概要

この章では、Oracle Secure Global Desktop (SGD) にログインしてソフトウェアの使用を開始する方法について説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- 23 ページの「SGD へのログイン」
- 26 ページの「Webtop の使用」
- 29 ページの「SGD 管理ツール」
- 34 ページの「ユーザーの作成」
- 41 ページの「Webtop へのアプリケーションの追加」
- 54 ページの「SGD の管理」
- 59 ページの「SGD の制御」
- 61 ページの「SGD ネットワークアーキテクチャー」
- 63 ページの「次の作業」

SGD へのログイン

SGD では、ユーザー認証用の複数の機構がサポートされます。デフォルトでは、SGD ホスト上にアカウントを保持するすべてのユーザーが、UNIX® または Linux システムのユーザー名とパスワードを使って SGD にログインできます。

▼ SGD にログインする方法

SGD を使用するには、SGD Client と、サポートされているブラウザが必要です。通常、SGD クライアントは、ログイン時に自動的にインストールされます。自動インストールを実行するには、ブラウザに、サポートされている Java™ プラグインツ

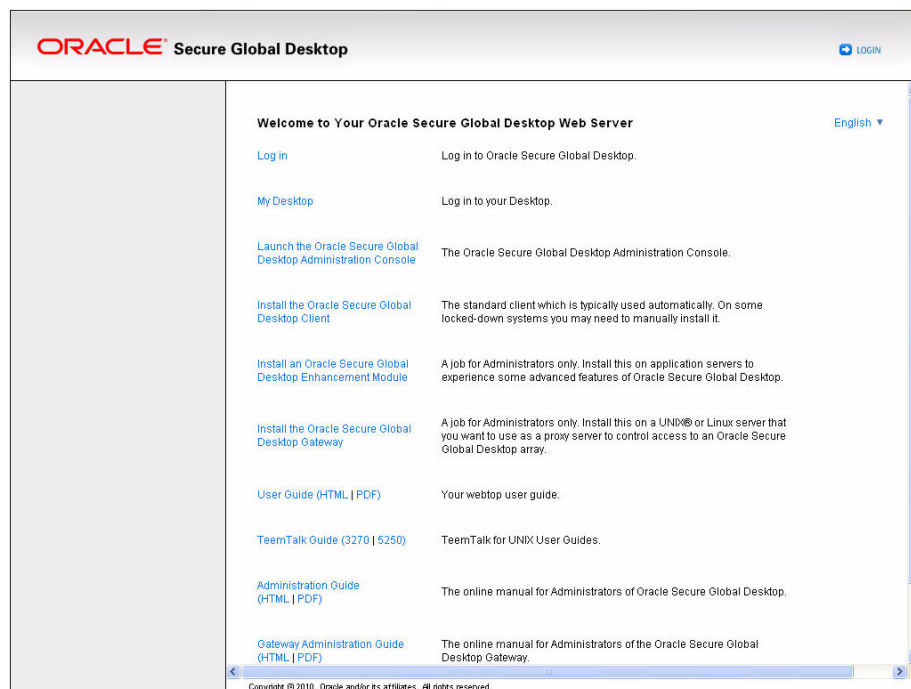
ルがあり、Java™ テクノロジーが有効になっている必要があります。Microsoft Windows Vista プラットフォームで Internet Explorer を使用している場合は、Internet Explorer の「セキュリティの設定」で、「信頼済みサイト」のリストに SGD サーバーの URL (Uniform Resource Locator) を追加する必要があります。

使用しているブラウザが Java テクノロジーに対応していない場合は、SGD Client を手動でインストールしてから SGD に接続する必要があります。9 ページの「[SGD Client の手動インストール](#)」を参照してください。

ブラウザで SGD を使用するには、JavaScript™ プログラミング言語を有効にする必要があります。

1. ブラウザを使用して、<http://server.example.com> に移動します。ここで、server.example.com は SGD サーバーの名前です。
SGD Web サーバーの開始画面が表示されます (図 3-1 を参照)。

図 3-1 SGD Web サーバーの開始画面



2. (省略可能) 使用する言語を選択します。

開始画面の上部付近にあるリストから言語を選択します。

開始画面が選択した言語で表示されます。

3. 「ログイン」をクリックします。

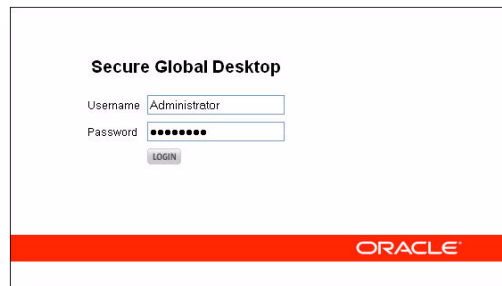
SGD のログインページが表示されます (図 3-2 を参照)。

4. ログインします。

SGD のインストール時に、SGD によって、「Administrator」というユーザー名を持つデフォルトの SGD 管理者が作成されます。このユーザーは、そのホスト上の UNIX または Linux システムの root ユーザーのパスワードを使って認証されます。

「ユーザー名」には Administrator と入力し、「パスワード」にはスーパーユーザー (root) パスワードを入力します。

図 3-2 SGD のログインページ



Java テクノロジーのセキュリティーメッセージが表示された場合は、「実行」をクリックして SGD Client をインストールします。

「信頼されない初期接続」メッセージが表示されます。図 3-3 を参照してください。

図 3-3 「信頼されない初期接続」メッセージ



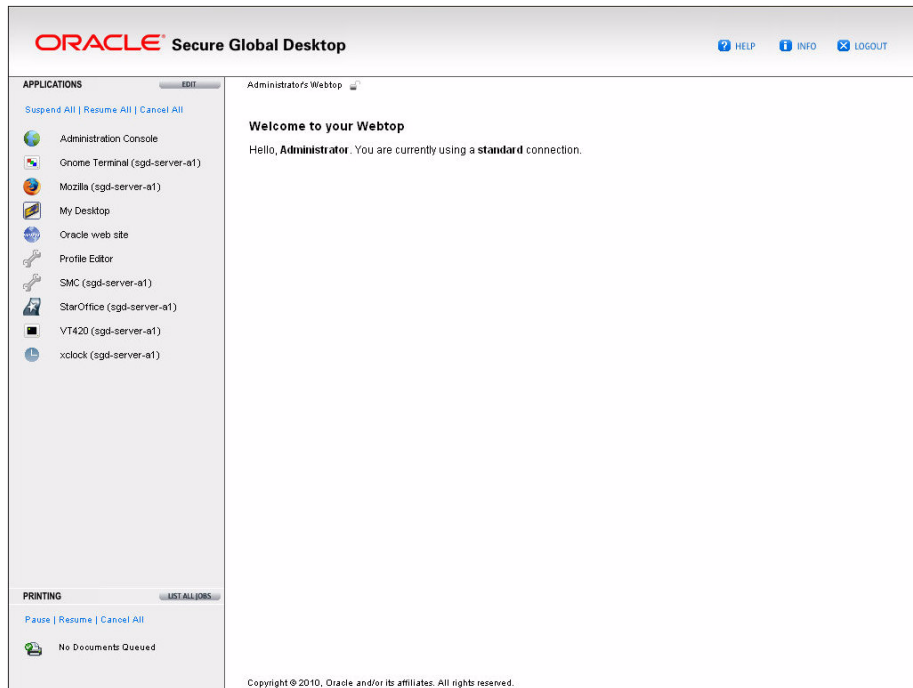
5. 「信頼されない初期接続」メッセージを確認します。

「信頼されない初期接続」メッセージは、SGD Client が信頼済みホストだけに接続するようにするためのセキュリティー機能です。このメッセージが表示されたら、ホスト名とサーバー証明書の詳細を確認してから、接続に同意します。メッセージは、接続先の各 SGD サーバーにつき 1 回だけ表示されます。

ホストの詳細が正しいことを確認します。正しい場合は「はい」をクリックします。正しくない場合は「いいえ」をクリックします。

Administrator ユーザーの Webtop が表示されます (図 3-4 を参照)。

図 3-4 Administrator ユーザーの Webtop



SGD Client アイコンがタスクバーに表示されます。図 3-5 を参照してください。

図 3-5 SGD Client タスクバーアイコン



Webtop の使用

Webtop には、SGD 管理ツールを初めとする、SGD を通してアクセスするアプリケーションとドキュメントが一覧表示されます。

Webtop には、SDG インストールプログラムによってホスト上で検出されたいくつかのサンプルアプリケーションが表示されます。このアプリケーションを使って、SGD の使用を開始できます。

アプリケーションの実行

アプリケーションを実行するには、Webtop 上でそのアプリケーションのリンクをクリックします (図 3-6 を参照)。

図 3-6 Webtop 上のアプリケーションのリンク



アプリケーションを起動すると、ユーザー名とパスワードの入力を要求される場合があります。これは、そのアプリケーションを実行しているアプリケーションサーバーに対する認証情報です。認証の詳細情報は安全にキャッシュすることができるので、ユーザーが 1 台のアプリケーションサーバーにつき複数回入力する必要はありません。

SGD 管理者は、アプリケーションの表示方法を設定します。アプリケーションには、ウィンドウ装飾なしで全画面表示されるものと、クライアントデバイス上のウィンドウと同じように動作するウィンドウに表示されるものがあります。

あるアプリケーションが実行中である場合、Webtop 上でそのアプリケーションの名前の前に三角形が、その後ろに括弧で囲まれた数字が、それぞれ表示されます。

図 3-7 に示すように、セッションツールバーもアプリケーション名の下に表示されません。

図 3-7 セッションツールバー



括弧内の数字は、ユーザーが起動したアプリケーションの独立したインスタンスの個数です。SGD 管理者は、実行可能なアプリケーションの同時インスタンス数を設定します。

アプリケーションの中には、表示されていなくても実行し続けるように設定されるものもあります。それらは「再開可能な」アプリケーションです。アプリケーションを終了しないでそのアプリケーションのウィンドウを閉じるには、アプリケーションを中断します。ウィンドウを再度表示してアプリケーションを使い始めるには、アプリケーションを再開します。

セッションツールバーは、アプリケーションの実行中のインスタンスごとに存在します。これを次のように使用します。

- アプリケーションセッションを中断するには、中断ボタンをクリックします。
- アプリケーションセッションを再開するには、再開ボタンをクリックします。
- アプリケーションセッションを終了するには、取り消しボタンをクリックします。

図 3-8 に示すように、アプリケーションセッションのセッションツールバーの表示 / 非表示を切り替えるには、三角形をクリックします。

図 3-8 非表示状態のセッションツールバー



アプリケーション領域の上部にあるリンクから、すべてのアプリケーションセッションを一度に管理できます。これらのリンクは次のように使用します。

- 実行中のすべてのアプリケーションを中断するには、「すべて中断」をクリックします。
- 中断されているすべてのアプリケーションを再開するには、「すべて再開」をクリックします。
- 実行中のアプリケーションや中断されているアプリケーションをすべて終了するには、「すべて取消し」をクリックします。

各アプリケーションは、再開可能かどうかに関する次の 3 つの設定のいずれかを持ちます。

設定内容	説明
使用しない	ユーザーが SGD からログアウトすると、アプリケーションは終了します。 再開可能でないアプリケーションを中断または再開することはできません。
ユーザーセッション中	アプリケーションは、ユーザーが SGD からログアウトするまで動作し続けます。 ログインしている間は、これらのアプリケーションを中断および再開できます。
一般	アプリケーションは、ユーザーが SGD からログアウトした後も動作し続けます。 再度ログインした際に、再開ボタンをクリックすると、実行中のアプリケーションが再度表示されます。

再開可能なアプリケーションは、次の理由で役立ちます。

- 起動に時間がかかるアプリケーションを、ユーザーが SGD からログアウトしたあとも実行したままにしておくことができます。
- ユーザーが、移動中にアプリケーションを実行したままにすることができます。
- ブラウザなどがクラッシュした場合に、ユーザーが容易に復旧できます。

設定の変更

Webtop のアプリケーション領域にある「編集」ボタンをクリックすると、設定を変更できます。

「グループの編集」タブで、ユーザーは、アプリケーションをグループにまとめることで、自身の Webtop を「パーソナライズ」できます。ユーザーは、グループを表示する方法とタイミングを決定できます。グループは、類似のアプリケーションをまとめたり、使用頻度があまり多くないアプリケーションを隠したりする場合に役立ちます。ユーザーの Webtop 上で実行可能なアプリケーションのリストに対してアプリケーションの追加や削除を行なえるのは、SGD 管理者だけです。

「クライアントの設定」タブで、SGD Client に関する設定を行うことができます。たとえば、使用するプロキシサーバーを設定したり、実行できるアプリケーションのリストをデスクトップの「スタート」または「起動」メニューに表示するかどうかを設定したりできます。設定内容は、クライアントデバイス上のプロファイルに格納されます。

ログアウト

ブラウザを閉じる前に SGD からログアウトする必要があります。そうすることで、SGD がこれ以上実行する必要のないアプリケーションをすべてシャットダウンして、SGD Client を停止できます。

ログアウトを行わないでブラウザを閉じた場合は、SGD Client が引き続き動作しているため、SGD からログアウトされていません。ブラウザを誤って閉じた場合は、再度ログインする方法でのみ、Webtop を表示できます。

SGD からログアウトするには、Webtop 上の「ログアウト」ボタンをクリックし、確認を要求されたら「OK」をクリックします。

SGD 管理ツール

SGD には、次の管理ツールがあります。

- **Administration Console** – ユーザーやユーザーセッションの管理、SGD サーバーの設定、および SGD ユーザー用のアプリケーションの設定を行うことができます。
- **Profile Editor** – 組織内のユーザーの SGD Client に使用する設定を定義できます。
- **tarantella コマンド** – SGD の制御と設定をコマンド行から行うことができます。

Administration Console および Profile Editor は、SGD 管理者の Webtop 上で使用できます。

Administration Console

Administration Console を表示するには、SGD でサポートされている、Safari 以外の任意のブラウザを使用できます。SGD のサポートされているブラウザの詳細は、『Oracle Secure Global Desktop 4.6 管理者ガイド』を参照してください。ブラウザで JavaScript プログラミング言語が有効になっている必要があります。

Administration Console は、アレイ内のプライマリ SGD サーバー上で実行すると最適に機能します。

Administration Console を起動する

Administration Console を起動するには、Webtop 上の該当するリンクをクリックします。

Webtop を表示しないで Administration Console を実行する場合は、次の場所から実行できます。

- <http://server.example.com> に移動し、「Launch the Secure Global Desktop Administration Console」リンクをクリックします
- <http://server.example.com/sgdadmin>

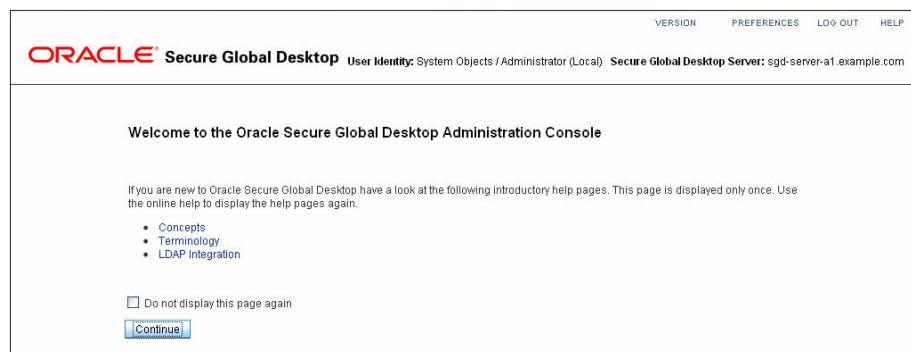
ここで、*server.example.com* は SGD サーバーの名前です。

Webtop を表示しないで Administration Console を実行する場合は、SGD 管理者としてログインするように要求されます。

Administration Console の使用

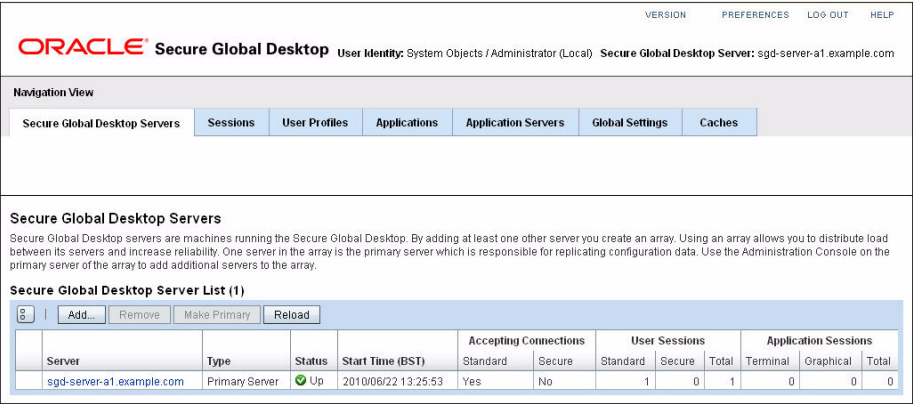
Administration Console にログインすると、開始画面が表示されます (図 3-9 を参照)。

図 3-9 Administration Console の開始画面



開始画面に含まれる、関連情報へのリンクを参照することをお勧めします。
Administration Console を表示するには、「続行」をクリックします。
Administration Console がナビゲーションビューに開きます (図 3-10 を参照)。

図 3-10 ナビゲーションビューの Administration Console



ナビゲーションビューは、SGD のさまざまな領域を管理するためのタブにアクセスできる「トップレベル」のビューです。次の表に、ナビゲーションビューで使用できるタブと、その使用目的の概要を示します。

タブ	説明
Secure Global Desktop サーバー	SGD サーバーの管理および設定。 このタブの詳細は、54 ページの「SGD の管理」を参照してください。
セッション	ユーザーの SGD セッションおよびアプリケーションセッションの管理。 このタブの詳細は、56 ページの「ユーザーの監視」を参照してください。
ユーザープロフィール	ユーザーの SGD 設定内容の管理および設定。 このタブの詳細は、34 ページの「ユーザーの作成」を参照してください。
アプリケーション	ユーザーが SGD を介して実行できるアプリケーションの管理および設定。 このタブの詳細は、41 ページの「Webtop へのアプリケーションの追加」を参照してください。
アプリケーションサーバー	SGD を介して表示されたアプリケーションを実行するアプリケーションサーバーの管理および設定。 このタブの詳細は、41 ページの「Webtop へのアプリケーションの追加」を参照してください。
グローバル設定	SGD 全体に適用される設定の指定。 このタブの詳細は、54 ページの「SGD の管理」を参照してください。
キャッシュ	SGD が格納したアプリケーションサーバーのパスワードと認証トークンの管理。

SGD は、次のディレクトリサービスの原則に基づいて構築されています。

- ユーザー、アプリケーション、およびアプリケーションサーバーは、ディレクトリ内のオブジェクトで表現されます。これらのオブジェクトは、組織を表現する組織階層として構成されます。
- オブジェクトのタイプが異なれば、属性として知られている設定内容も異なる。
- オブジェクト間の関係は、重要で意味がある。
- 各オブジェクトは、一意の名前で識別される。

SGD には、さまざまなタイプのオブジェクトがあります。処理対象のオブジェクトを選択すると、Administration Console がオブジェクトビューに変わります。Administration Console には、オブジェクトビューとナビゲーションビューを切り替えられるリンクが用意されています。また、図 3-11 に示すように、最近処理したオブジェクト間を相互に切り替えられる「オブジェクト履歴」も用意されています。

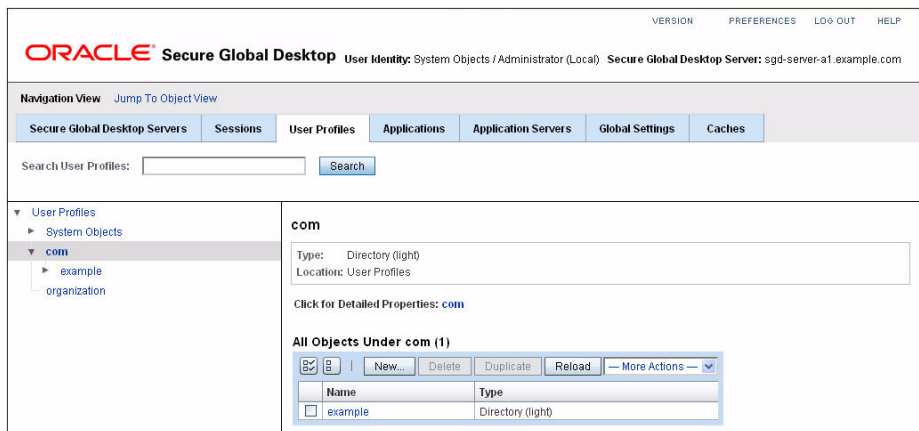
図 3-11 Administration Console のナビゲーションリンク



注意 - Administration Console の使用中は、ブラウザの「戻る」ボタンを使用しないでください。代わりに、ナビゲーションリンクを使って Administration Console のページ間を移動してください。

「ユーザープロファイル」、「アプリケーション」、および「アプリケーションサーバー」の各タブは、2 つのセクションに分けられます。図 3-12 に示すように、左側がナビゲーションツリーで、右側がコンテンツ領域です。ナビゲーションツリーには、ユーザーの組織階層を構築するために使用されるコンテナオブジェクトだけが表示されます。ナビゲーションツリーでオブジェクトをブラウズして選択すると、選択したオブジェクトに含まれているオブジェクトのリストがコンテンツ領域に表示されます。

図 3-12 ナビゲーションツリーおよびコンテンツ領域



Administration Console のタブおよび画面のいくつかには、検索フィールドがあります。検索では大文字と小文字が区別されず、ワイルドカード文字「*」のみを使用できます。検索結果はテーブルに表示され、150 ヒット以内に制限されます。

Administration Console のほとんどのタブは、情報を表形式で表します。表のセル内の情報がリンクになっていて、クリックすると詳細な情報が表示される場合もあります。

tarantella コマンド

tarantella コマンドは、*install-dir/bin* ディレクトリにインストールされるスクリプトです。デフォルトでは、*install-dir* は */opt/tarantella* です。このスクリプトは標準 PATH 上に存在しないため、このコマンドを実行するたびにフルパスを指定するか、コマンドを実行する前に */opt/tarantella/bin* ディレクトリに移動する必要があります。あるいは、次の操作を行います。

- */opt/tarantella/bin* を PATH に追加します。次に例を示します。

```
PATH=$PATH:/opt/tarantella/bin ; export PATH
```

- エイリアスを作成します。次に例を示します。

```
alias t=/opt/tarantella/bin/tarantella
```

tarantella コマンドは実際にはコマンド群であり、各コマンドが独自のサブコマンドセットを持つことができます。サブコマンドは、常に tarantella コマンドを通して実行します。次に例を示します。

```
# tarantella license list
```

どのコマンドでも、*--help* コマンド行引数を使用してヘルプを利用できます。

多くのコマンドは、それらを基にしてスクリプトを構築できるように設計されています。

特定の `tarantella` コマンドをどのユーザーが使用できるかに関しては、次の制限が適用されます。

- SGD サーバーおよび SGD Web サーバーを制御するコマンドを実行できるのは、スーパーユーザー (`root`) だけです。
- SGD サーバーのアレイを作成および管理するためのコマンドを実行できるのは、SGD 管理者だけです
- その他のコマンドはすべて、`ttaserv` グループ内のどのユーザーでも実行できます。

ユーザーを `ttaserv` グループのメンバーにするには、`usermod-G` コマンドを使用します。`ttaserv` グループは、ユーザーのプライマリグループまたは実効グループでなくてもかまいません。

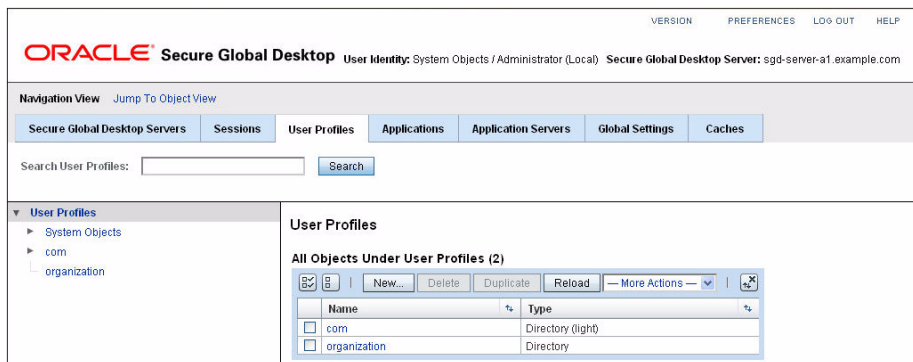
ユーザーの作成

ここでは、Administration Console を使用して SGD ユーザーを作成する方法について説明します。これを行うには、ユーザープロファイルオブジェクトを作成します。ユーザープロファイルは、SGD にログインできるかどうかや実行できるアプリケーションなどの、ユーザーの SGD 設定を制御するために使用します。ここでは、ユーザーを SGD 管理者にする方法についても説明します。

ヒント - ユーザーに関する情報を入手するために LDAP (Lightweight Directory Access Protocol) ディレクトリを使用するように SGD を設定できます。LDAP 統合用に SGD を設定する場合は、ユーザープロファイルを作成する必要はありません。LDAP 統合用に SGD を設定する方法の詳細は、『*Oracle Secure Global Desktop 4.6 管理者ガイド*』を参照してください。

Administration Console の「ユーザープロファイル」タブでは、ユーザープロファイルを作成および管理します。[図 3-13](#) を参照してください。

図 3-13 「ユーザープロファイル」タブ



デフォルトでは、このタブには、**organization** と呼ばれるディレクトリオブジェクト (コマンド行では `o=organization`) と **com** と呼ばれるディレクトリ (軽量) オブジェクト (コマンド行では `dc=com`) の 2 つの「トップレベル」のオブジェクトが含まれています。これらのオブジェクトの名前変更や削除、または新しいトップレベルのオブジェクトの作成を行うことができます。ユーザーの管理に必要なオブジェクトはすべて、これらのトップレベルのオブジェクトタイプ内で作成します。

他のディレクトリオブジェクトを使って、組織を分割できます。たとえば、組織内の部門ごとにディレクトリ (組織単位) を使用することができます。

ユーザープロファイルおよび SGD 管理者の作成

ここでは、ユーザー自身のユーザープロファイルを作成する方法、およびユーザー自身を SGD 管理者にする方法について説明します。SGD 管理者は、必ずユーザープロファイルを保持しています。ユーザープロファイルを作成できるのは、SGD 管理者に限られます。

「Global Administrators」ロールに所属しているユーザーは、SGD 管理者です。SGD 管理者は、任意の SGD 管理ツールを使用して SGD を設定できます。「Global Administrators」ロールに所属していないユーザーは、管理用の権限を持ちません。

「Global Administrators」ロールは、「ユーザープロファイル」タブのシステムオブジェクト組織にあるオブジェクトです。「Global Administrators」ロールオブジェクトは、ユーザーに管理者特権を割り当て、管理ツールへのアクセスを許可するために使用されます。

これらの手順に従ったあとは、UNIX または Linux システムのユーザー名とパスワードを使って SGD にログインし、Administration Console を実行できます。

また、`tarantella object new_person` コマンドを使ってユーザープロファイルを作成したり、`tarantella role add_member` コマンドを使って SGD 管理者を追加したりすることもできます。

▼ ユーザープロファイルを作成する方法

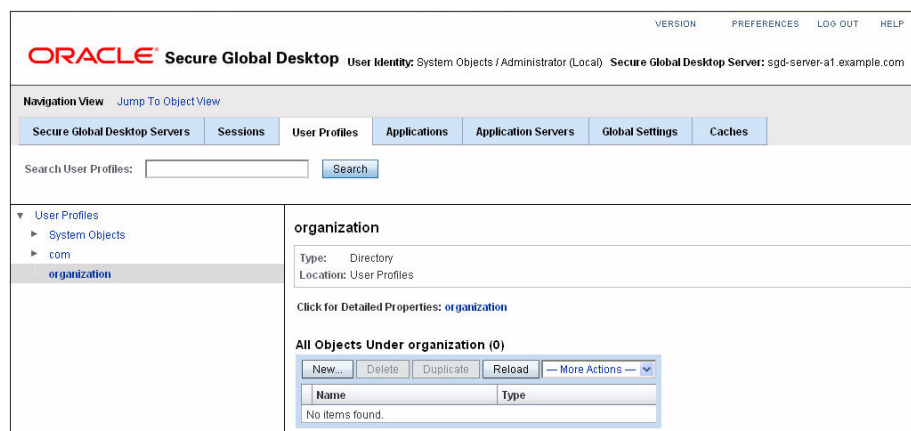
1. **Administration Console** で、「ユーザープロファイル」タブをクリックします。

2. 組織階層内のオブジェクトを選択します。

ナビゲーションツリーを使用して、組織オブジェクトを選択します
(図 3-14 を参照)。

ユーザープロファイルは、必要に応じて、あとで別の場所に移動できます。

図 3-14 選択された組織オブジェクト



3. ユーザープロファイルオブジェクトを作成します。

a. コンテンツ領域の「新規」をクリックします。

「新規オブジェクトの作成」ウィンドウが表示されます。

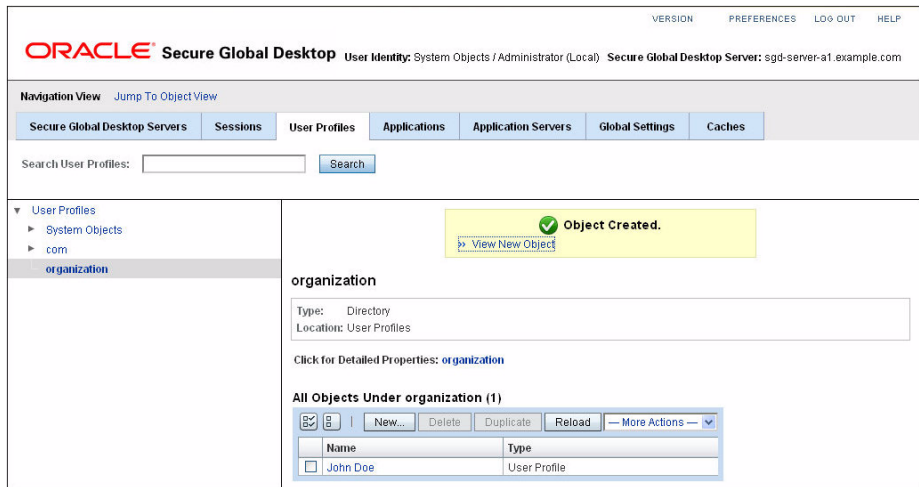
b. 「名前」フィールドに、ユーザーの名前を入力します。

たとえば、John Doe などです。

c. 「ユーザープロファイル」オプションが選択されていることを確認し、
「作成」をクリックします。

「新規オブジェクトの作成」ウィンドウが閉じ、コンテンツ領域に新しいオブジェクトが反映されます。図 3-15 を参照してください。

図 3-15 新しく作成されたユーザープロファイル



4. 「新規オブジェクトの表示」リンクをクリックします。

ユーザープロファイルの「一般」タブがオブジェクトビューに表示されます。
図 3-16 を参照してください。

5. ユーザープロファイルを設定します。

a. 「姓」フィールドに、ユーザーの姓を入力します。

たとえば、Doe などです。

b. 「ログイン」チェックボックスが選択されていることと、「複数」チェックボックスが選択されていないことを確認します。

これにより、ユーザーは確実に SGD にログインできます。

c. 「ユーザー名」フィールドに、UNIX または Linux システムのユーザー名を入力します。

たとえば、jdoe などです。

この属性は、ユーザーの識別や認証に使用されることがあります。

d. 「電子メールアドレス」フィールドに、ユーザーの電子メールアドレスを入力します。

たとえば、john.doe@example.com などです。

この属性は、ユーザーの識別や認証に使用されることがあります。

図 3-16 ユーザープロファイルの「一般」タブ

The screenshot displays the Oracle Secure Global Desktop Administration Console interface. At the top, there are navigation links: VERSION, PREFERENCES, LOG OUT, and HELP. Below this is the header section with the Oracle logo and the text 'Secure Global Desktop'. The main content area is titled 'Object View' and includes a 'Jump To Navigation View' link and an 'Object History' dropdown menu set to 'John Doe'. A horizontal tab bar contains several tabs: General, Performance, Client Device, Printing, Security, Assigned Applications, Passwords, Tokens, User Sessions, and Application Sessions. The 'General' tab is currently selected. Below the tabs, the title 'John Doe - General' is shown, followed by 'Save' and 'Reset' buttons. The form contains the following fields and sections:

- Type:** User Profile
- Location:** User Profiles / organization
- Designation:** A section with a 'Name' field (containing 'John Doe') and a 'Comment' field (with a placeholder text: 'Optional comment field for administrator notes.').
- Secure Global Desktop Authentication:** A section with a 'Login' checkbox (checked, labeled 'Enabled') and a 'Multiple' checkbox (unchecked). Below this is a 'Login Name' field (containing 'jdoe') and an 'Email Address' field (containing 'john.doe@example.com').

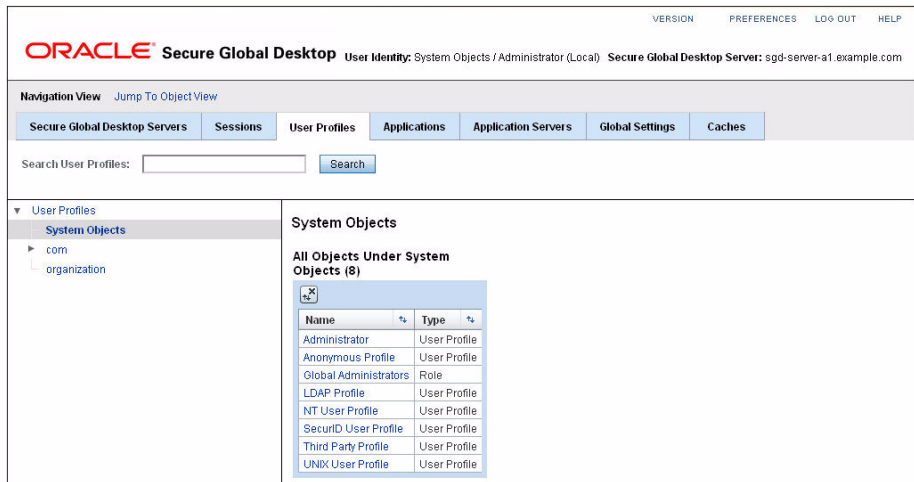
At the bottom of the form, there is a 'Back to top' link.

e. 「保存」をクリックします。

▼ SGD 管理者を追加する方法

1. **Administration Console** で、「ユーザープロファイル」タブをクリックします。
2. ナビゲーションツリーで、「システムオブジェクト」をクリックします。
「システムオブジェクト」テーブルがコンテンツ領域に表示されます
(図 3-17 を参照)。

図 3-17 「システムオブジェクト」テーブル



- 「システムオブジェクト」テーブルで、「Global Administrators」リンクをクリックします。

「メンバー」タブがオブジェクトビューに表示されます (図 3-18 を参照)。

図 3-18 「メンバー」タブ



- 「編集可能なメンバー」テーブルの「追加」をクリックします。

「ユーザー割り当ての追加」ウィンドウが表示されます。図 3-19 を参照してください。

- ユーザープロファイルの位置を指定します。

「検索」フィールドを使用してユーザープロファイルを見つけるか、ナビゲーションツリーをブラウズします。

6. ユーザープロファイルの横にあるチェックボックスを選択し、「追加」をクリックします。

図 3-19 「ユーザー割り当ての追加」ウィンドウ

ORACLE® Secure Global Desktop

Add User Assignment
Select the object to assign.

Name: Global Administrators
Type: Role
Location: User Profiles / System Objects

Search User Profiles:

▼ User Profiles
 ▶ System Objects
 ▶ com
 organization

organization
Type: Directory
Location: User Profiles

All Objects Under organization (1)

<input type="checkbox"/>	Name	Type
<input checked="" type="checkbox"/>	John Doe	User Profile

「メンバー」タブが表示され、ユーザープロファイルが「編集可能なメンバー」テーブルに表示されます。図 3-20 を参照してください。

図 3-20 更新された「メンバー」タブ

ORACLE® Secure Global Desktop VERSION PREFERENCES LOG OUT HELP

User Identity: System Objects / Administrator (Local) **Secure Global Desktop Server:** sgd-server-a1.example.com

Object View [Jump To Navigation View](#) **Object History:** Global Administrators

Members **Assigned Applications**

Global Administrators - Members

Type: Role
Location: User Profiles / System Objects

Editable Members

Directly Assigned Member Objects (2)

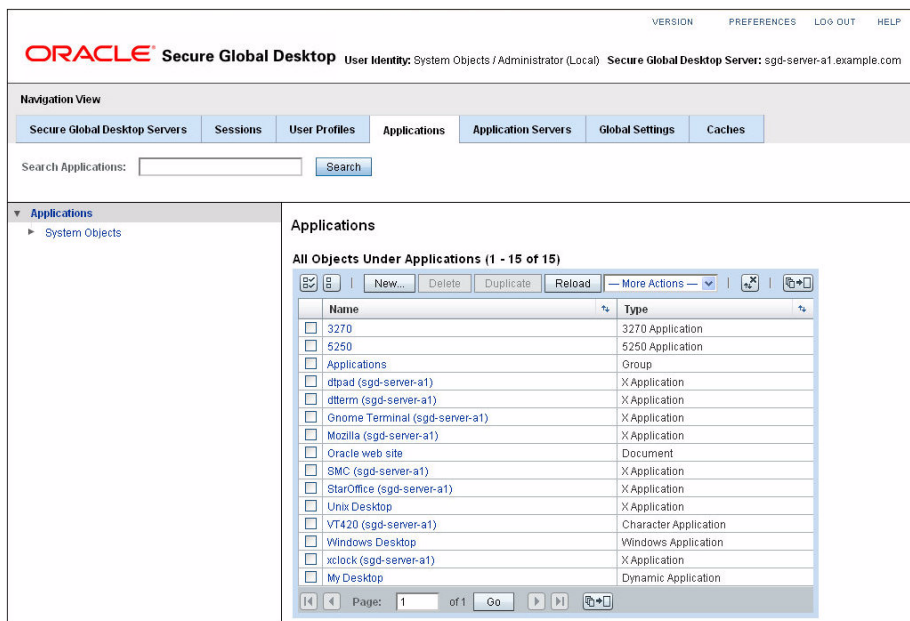
<input type="checkbox"/>	Member Name	Type	Location
<input type="checkbox"/>	Administrator	User Profile	User Profiles / System Objects
<input type="checkbox"/>	John Doe	User Profile	User Profiles / organization

Webtop へのアプリケーションの追加

ここでは、Administration Console を使って、SGD を介して表示できるアプリケーションオブジェクトを作成する方法、およびそのアプリケーションを起動するためのリンクをユーザーの Webtop 上に表示する方法について説明します。

Administration Console の「アプリケーション」タブでは、ユーザーが SGD を介して実行できるアプリケーションを設定します。図 3-21 を参照してください。「アプリケーションサーバー」タブでは、アプリケーションを実行するアプリケーションサーバーを設定します。図 3-22 を参照してください。

図 3-21 「アプリケーション」タブ



アプリケーションオブジェクトは、必ずアプリケーション組織 (コマンド行では `o=applications`) に含まれています。アプリケーションサーバーオブジェクトは、必ずアプリケーションサーバー組織 (コマンド行では `o=appservers`) に含まれています。

ディレクトリ (組織単位) オブジェクトを使用して、これらの組織を分割できます。たとえば、ディレクトリオブジェクトを使って、特定の部門で使用するアプリケーションを格納できます。また、アプリケーションやアプリケーションサーバーをグループに整理することもできます。

SGD では、ユーザープロファイル、アプリケーション、およびアプリケーションサーバーの間にリンクまたは関係があります。Administration Console では、これらのリンクを割り当てと呼びます。それぞれの関係は、割り当てタブから管理されます。たとえば、ユーザープロファイルオブジェクトには、ユーザーに割り当てられるすべてのアプリケーションオブジェクトを示す「割り当て済みのアプリケーション」タブが用意されています。これらは、ユーザーの Webtop 上に表示されるアプリケーションです。同様に、アプリケーションオブジェクトには、アプリケーションを実行できるアプリケーションサーバーを示す「ホストしているアプリケーションサーバー」タブが用意されています。

ヒント - アプリケーションをユーザーに割り当てるために、LDAP ディレクトリの検索を使用するように SGD を設定できます。これは、DSI (Directory Services Integration) と呼ばれます。DSI の設定方法の詳細は、『Oracle Secure Global Desktop 4.6 管理者ガイド』を参照してください。

アプリケーションオブジェクトの作成および割り当て

アプリケーションオブジェクトの作成および割り当てには、次の手順が必要です。

1. アプリケーションサーバーオブジェクトを作成します。

この手順では、アプリケーションを実行するアプリケーションサーバーの名前と場所を指定します。

[43 ページの「アプリケーションサーバーオブジェクトを作成する方法」](#)を参照してください。

2. アプリケーションオブジェクトを作成します。

この手順では、ユーザーがアプリケーションを起動するときに実行するコマンドとアプリケーションの表示方法を指定します。

[45 ページの「アプリケーションオブジェクトを作成する方法」](#)を参照してください。

3. アプリケーションオブジェクトを割り当てます。

この手順では、アプリケーションサーバーオブジェクトをアプリケーションオブジェクトに割り当てて、SGD がアプリケーションの実行場所を認識できるようにします。次に、アプリケーションオブジェクトを「ユーザープロファイル」タブのオブジェクトに割り当てて、SGD がアプリケーションのリンクをユーザーの Webtop 上に配置できるようにします。

[49 ページの「アプリケーションオブジェクトを割り当てる方法」](#)を参照してください。

オブジェクトを作成し、それらを割り当てることができるのは、SGD 管理者に限られます。

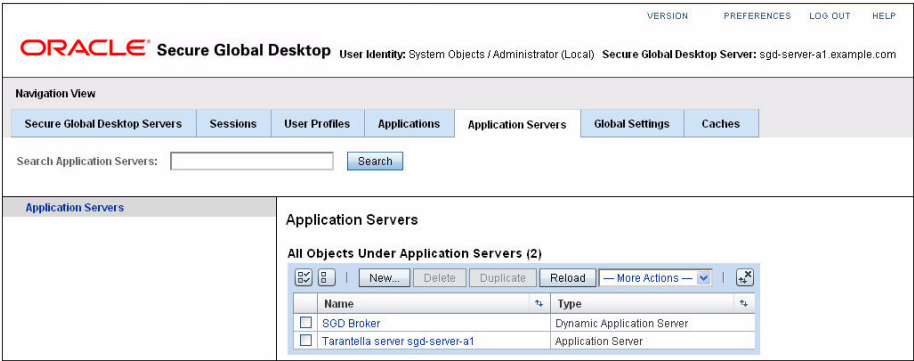
次の手順では、Windows アプリケーションオブジェクトを作成し、割り当てする方法について説明します。他のアプリケーションタイプについても、原則は同じです。

コマンド行で、tarantella object コマンド群を使って、これらのすべての手順を実行することもできます。

▼ アプリケーションサーバーオブジェクトを作成する方法

1. Administration Console で、「アプリケーションサーバー」タブをクリックします。

図 3-22 「アプリケーションサーバー」タブ



2. アプリケーションサーバーオブジェクトを作成します。

アプリケーションサーバーオブジェクトをアプリケーションサーバー組織に直接作成します (図 3-22 を参照)。作成したアプリケーションは、必要に応じて、あとで別の場所に移動できます。

- a. コンテンツ領域の「新規」をクリックします。

「新規オブジェクトの作成」ウィンドウが表示されます。

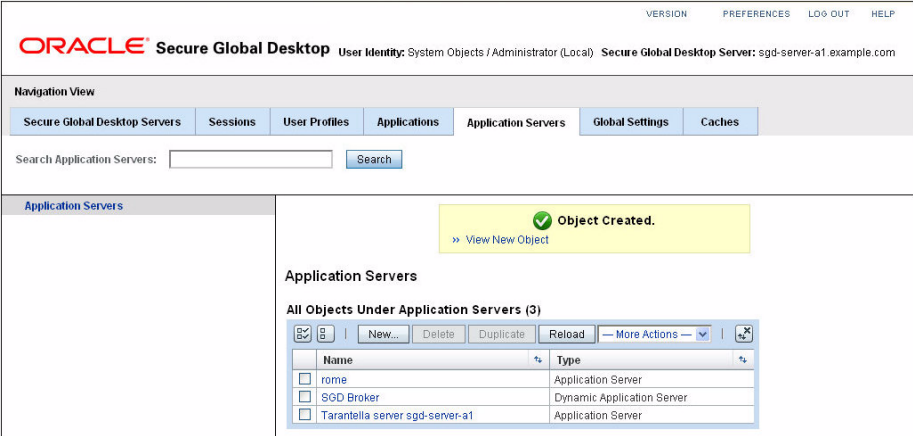
- b. 「名前」フィールドに、アプリケーションサーバーの名前を入力します。

たとえば、「rome」と入力します。

- c. 「アプリケーションサーバー」オプションが選択されていることを確認し、「作成」をクリックします。

「新規オブジェクトの作成」ウィンドウが閉じ、コンテンツ領域に新しいオブジェクトが反映されます。図 3-23 を参照してください。

図 3-23 新しく作成されたアプリケーションサーバーオブジェクト



3. 「新規オブジェクトの表示」リンクをクリックします。

アプリケーションサーバーオブジェクトの「一般」タブがオブジェクトビューに表示されます (図 3-24 を参照)。

4. アプリケーションサーバーオブジェクトを設定します。

- a. 「アドレス」フィールドに、アプリケーションサーバーの完全修飾ドメイン名システム (DNS) 名を入力します。

たとえば、rome.example.com などです。

- b. 「アプリケーション起動」チェックボックスが選択されていることを確認します。

これにより、そのアプリケーションサーバーがアプリケーションの実行に使用可能であることが SGD に通知されます。

- c. 「ドメイン名」フィールドに、Microsoft Windows ドメインの名前を入力します。

たとえば、「rome」と入力します。

この属性は、ユーザーがアプリケーションを実行する際の認証プロセスに使用されます。

図 3-24 アプリケーションサーバーオブジェクトの「一般」タブ

The screenshot displays the Oracle Secure Global Desktop Administration Console interface. At the top, the Oracle logo and 'Secure Global Desktop' text are visible, along with user information: 'System Objects / Administrator (Local)' and 'Secure Global Desktop Server: sgd-server-a1.example.com'. Navigation links include 'VERSION', 'PREFERENCES', 'LOG OUT', and 'HELP'. Below this, the 'Object View' section shows 'Jump To Navigation View' and 'Object History: rome'. A tabbed interface has 'General', 'Performance', 'Hosted Applications', 'Application Sessions', and 'Passwords'. The 'General' tab is active, showing 'rome - General' with 'Save' and 'Reset' buttons. The form contains fields for 'Type' (Application Server) and 'Location' (Application Servers). Under 'Designation', there are fields for 'Name' (rome), 'Comment' (with a note: 'Optional comment field for administrator notes.'), 'Address' (rome.example.com, with a note: 'The network address of the application server. Using a DNS name rather than an IP address is recommended.'), 'Application Start' (checked 'Enabled', with a note: 'Whether applications can be started on this application server. You can use this setting, for example, to make an application server temporarily unavailable while you carry out maintenance work.'), 'User Assignment' (with a note: 'Optional user assignment to link users to application servers.'), and 'Maximum Count' (with a note: 'Optional count for the maximum number of applications which can be run on this application server.'). A 'Back to top' link is at the bottom of the form. The 'Application Authentication' section is partially visible at the bottom.

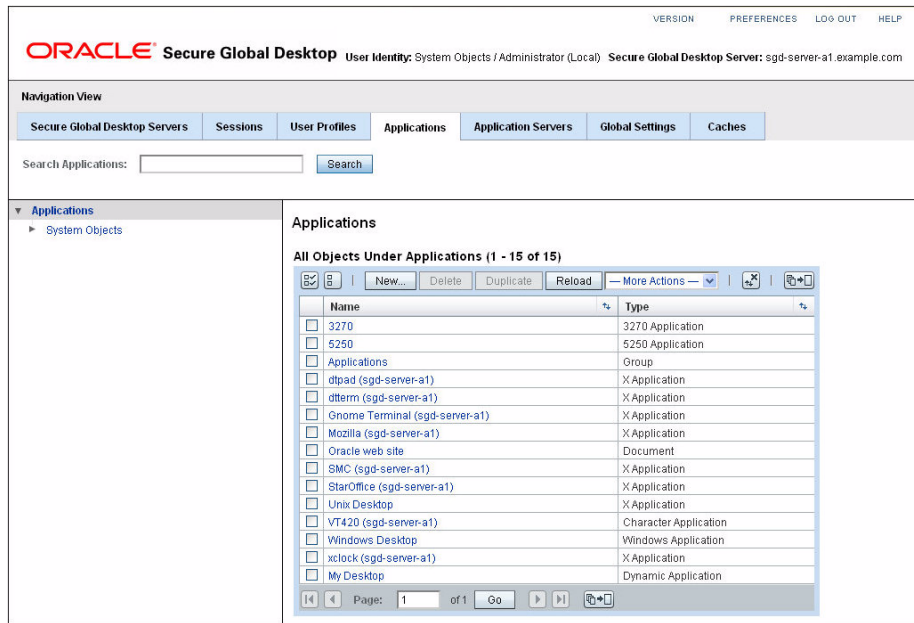
d. 「保存」をクリックします。

▼ アプリケーションオブジェクトを作成する方法

次の手順は、Windows アプリケーションオブジェクトを作成する方法の例を示しています。

1. Administration Console で、「アプリケーション」タブをクリックします。

図 3-25 「アプリケーション」タブ



2. アプリケーションオブジェクトを作成します。

アプリケーションオブジェクトをアプリケーション組織に直接作成します (図 3-25 を参照)。作成したアプリケーションは、必要に応じて、あとで別の場所に移動できます。

a. コンテンツ領域の「新規」をクリックします。

「新規オブジェクトの作成」ウィンドウが表示されます。

b. 「名前」フィールドに、アプリケーションの名前を入力します。

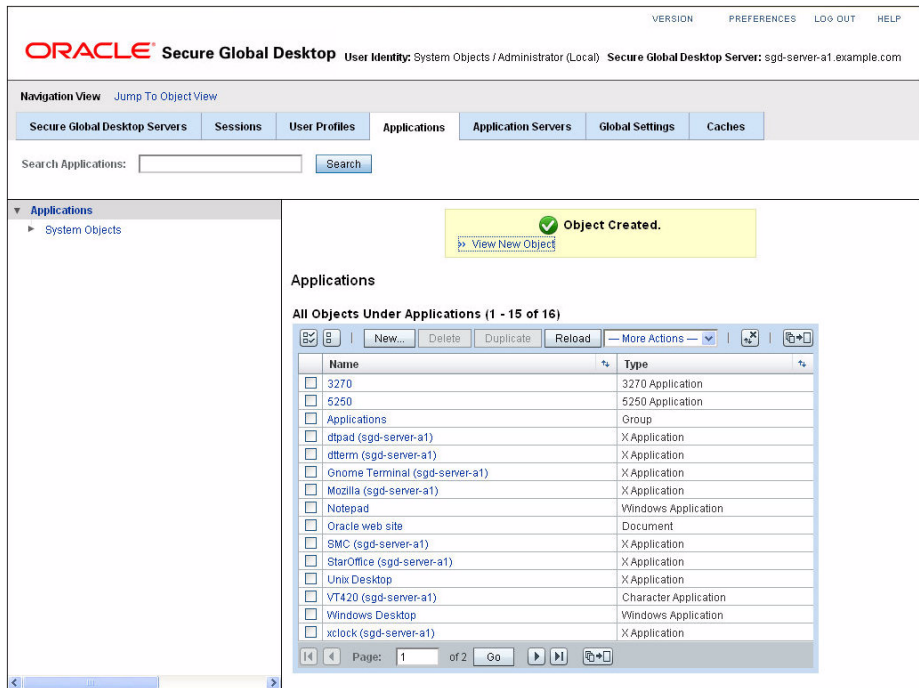
たとえば、「Notepad」と入力します。

入力した名前は、Webtop 上のアプリケーションリンクに使用されます。

c. 「Windows アプリケーション」オプションが選択されていることを確認し、「作成」をクリックします。

「新規オブジェクトの作成」ウィンドウが閉じ、コンテンツ領域に新しいオブジェクトが反映されます (図 3-26 を参照)。

図 3-26 新しく作成されたアプリケーションオブジェクト



3. 「新規オブジェクトの表示」リンクをクリックします。

アプリケーションオブジェクトの「一般」タブがオブジェクトビューに表示されます。

4. アプリケーションを設定します。

Windows アプリケーションの設定の詳細は、『Oracle Secure Global Desktop 4.6 管理者ガイド』を参照してください。この例では、次の設定以外は、デフォルトの設定で問題ありません。

a. 「起動」タブをクリックします。

b. 「アプリケーションコマンド」フィールドに、アプリケーションコマンドを入力します。

Windows デスクトップセッションの場合は、このフィールドを空白のままにします。

特定のアプリケーションを実行するには、そのアプリケーションを実行するコマンドのフルパスを入力します。たとえば、「C:\Windows\notepad.exe」と入力します。

アプリケーションのインストール先は、すべてのアプリケーションサーバー上で同じ場所であればいけません。

- c. 「SGD Remote Desktop Client」チェックボックスが選択されていることを確認します。

図 3-27 「起動」タブ

The screenshot shows the Oracle Secure Global Desktop web interface. At the top, there's a header with 'ORACLE Secure Global Desktop' and user information: 'User Identity: System Objects / Administrator (Local) Secure Global Desktop Server: sgd-server-a1.example.com'. Below the header is a navigation bar with tabs: 'General', 'Launch' (selected), 'Presentation', 'Performance', 'Client Device', 'Printing', 'Hosting Application Servers', 'Assigned User Profiles', and 'Application Sessions'. The 'Launch' tab is active, showing the 'Notepad - Launch' configuration. It includes fields for 'Type' (Windows Application), 'Location' (Applications), 'Application Command' (C:\Windows\notepad.exe), 'Arguments for Command' (empty), 'Working Directory' (empty), and 'Local Client Launch' (checkbox, unchecked). Below this is the 'SGD Remote Desktop Client' section with 'SGD Remote Desktop Client' (checkbox, checked), 'Console Mode' (checkbox, unchecked), and 'Arguments' (empty). 'Save' and 'Reset' buttons are at the top right of the configuration area.

- d. 「保存」をクリックします。

5. 「プレゼンテーション」タブをクリックします。

- a. ウィンドウタイプを設定します。

Windows デスクトップセッションの場合は、リストから「キオスク」設定を選択します。

個別のアプリケーションの場合は、リストから「独立ウィンドウ」設定を選択します。「ウィンドウのサイズ」オプションを使用して、ウィンドウのサイズを指定できます。

図 3-28 「プレゼンテーション」タブ

b. 「保存」をクリックします。

▼ アプリケーションオブジェクトを割り当てる方法

1. **Administration Console** で、「アプリケーション」タブをクリックし、アプリケーションオブジェクトを選択します。

「一般」タブがオブジェクトビューに表示されます。

2. アプリケーションを実行できるアプリケーションサーバーを指定します。

a. 「ホストしているアプリケーションサーバー」タブをクリックします。

図 3-29 を参照してください。

図 3-29 「ホストしているアプリケーションサーバー」 タブ

ORACLE Secure Global Desktop User Identity: System Objects / Administrator (Local) Secure Global Desktop Server: sgd-server-a1.example.com

VERSION PREFERENCES LOG OUT HELP

Object View Jump To Navigation View Object History: Notepad

General Launch Presentation Performance Client Device Printing Hosting Application Servers Assigned User Profiles Application Sessions

Notepad - Hosting Application Servers
This tab page lists the application servers hosting the selected application.
Type: Windows Application
Location: Applications

Effective Application Servers

Application Server Name	Type	Location	Assignment Type
No Assignment Found.			

Editable Assignments

Add Delete

Object Name	Type	Location
No Assignment Found.		

- b. 「編集可能な割り当て」テーブルの「追加」をクリックします。

「アプリケーションサーバー割り当ての追加」ウィンドウが表示されます。

図 3-30 を参照してください。

- c. アプリケーションサーバーの位置を指定します。

「検索」フィールドを使用してアプリケーションサーバーオブジェクトを見つけるか、ナビゲーションツリーをブラウズします。

- d. アプリケーションサーバーオブジェクトの横にあるチェックボックスを選択し、「追加」をクリックします。

複数のアプリケーションサーバーオブジェクトを選択した場合は、SGD によって、アプリケーションサーバー間の負荷分散が行われます。

アプリケーションサーバーオブジェクトを含むグループオブジェクトを選択した場合は、そのグループ内のすべてのアプリケーションサーバーオブジェクトが選択されます。

図 3-30 「アプリケーションサーバー割り当ての追加」ウィンドウ

ORACLE® Secure Global Desktop

Add Application Server Assignment
Select the object to assign.

Name: Notepad
Type: Windows Application
Location: Applications

Search Application Servers:

Application Servers

All Objects Under Application Servers (3)

Name	Type
<input checked="" type="checkbox"/> rome	Application Server
<input type="checkbox"/> SGD Broker	Dynamic Application Server
<input type="checkbox"/> Tarantella server sgd-server-a1	Application Server

「有効なアプリケーションサーバー」テーブルが、選択したアプリケーションサーバーオブジェクトで更新されます (図 3-31 を参照)。

図 3-31 更新された「ホストしているアプリケーションサーバー」タブ

ORACLE® Secure Global Desktop User Identity: System Objects / Administrator (Local) Secure Global Desktop Server: sgd-server-a1.example.com

Object View [Jump To Navigation View](#) Object History: **Notepad**

General **Launch** **Presentation** **Performance** **Client Device** **Printing** **Hosting Application Servers** **Assigned User Profiles** **Application Sessions**

Notepad - Hosting Application Servers
This tab page lists the application servers hosting the selected application.

Type: Windows Application
Location: Applications

Effective Application Servers

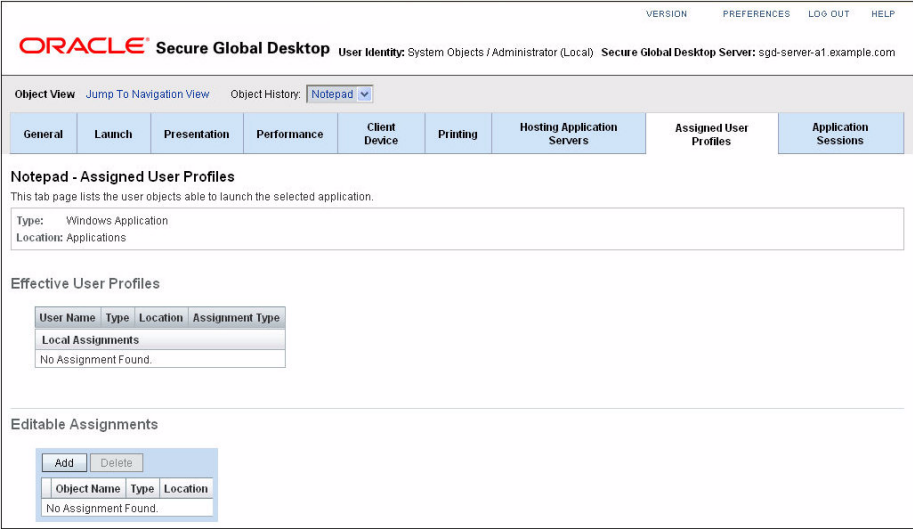
Application Server Name	Type	Location	Assignment Type
rome	Application Server	Application Servers	Direct

Editable Assignments

Object Name	Type	Location
<input type="checkbox"/> rome	Application Server	Application Servers

3. Webtop 上にアプリケーションを表示するユーザーを指定します。
 - a. 「割り当て済みのユーザープロファイル」タブをクリックします。
図 3-32 を参照してください。

図 3-32 「割り当て済みのユーザープロファイル」タブ



- b. 「編集可能な割り当て」テーブルの「追加」をクリックします。
- 「ユーザー割り当ての追加」ウィンドウが表示されます (図 3-33 を参照)。
- c. ユーザープロファイルの位置を指定します。
- 「検索」フィールドを使用してユーザープロファイルを見つけるか、ナビゲーションツリーをブラウズします。
- アプリケーションオブジェクトは、ユーザープロファイルまたはディレクトリオブジェクトに割り当てることができます。
- アプリケーションオブジェクトをディレクトリオブジェクトに割り当てた場合は、そのディレクトリオブジェクトに含まれるすべてのユーザープロファイルが自動的にそのアプリケーションを受け取ります。これは、継承と呼ばれます。アプリケーションオブジェクトをディレクトリオブジェクトに割り当てると、より効率的です。
- d. ユーザープロファイルの横にあるチェックボックスを選択し、「追加」をクリックします。

図 3-33 「ユーザー割り当ての追加」 ウィンドウ

ORACLE Secure Global Desktop

Add User Assignment
Select the object to assign.

Name: Notepad
Type: Windows Application
Location: Applications

Search User Profiles:

User Profiles

- System Objects
- com
- organization**

organization

Type: Directory
Location: User Profiles

All Objects Under organization (1)

	Name	Type
<input checked="" type="checkbox"/>	John Doe	User Profile

「有効なユーザープロファイル」テーブルが、選択したユーザーで更新されます。図 3-34 を参照してください。

図 3-34 更新された「割り当て済みのユーザープロファイル」タブ

ORACLE Secure Global Desktop User Identity: System Objects / Administrator (Local) Secure Global Desktop Server: sgd-server-a1.example.com

Object View Object History:

General Launch Presentation Performance Client Device Printing Hosting Application Servers Assigned User Profiles Application Sessions

Notepad - Assigned User Profiles

This tab page lists the user objects able to launch the selected application.

Type: Windows Application
Location: Applications

Effective User Profiles

User Name	Type	Location	Assignment Type
Local Assignments			
John Doe	User Profile	User Profiles / organization	Direct

Editable Assignments

	Object Name	Type	Location
<input type="checkbox"/>	John Doe	User Profile	User Profiles / organization

4. アプリケーションが Webtop 上に表示されていることを確認します。

場合によっては、いったんログアウトしてから、UNIX または Linux システムのユーザー名とパスワードを使ってログインして、Webtop 上のアプリケーションを確認する必要があります。

SGD の管理

Administration Console の「グローバル設定」タブでは、SGD 全体に適用される設定を指定します。図 3-35 を参照してください。

図 3-35 「グローバル設定」タブ

The screenshot displays the Oracle Secure Global Desktop Administration Console interface. At the top, the header includes the Oracle logo, the product name 'Secure Global Desktop', and user information: 'User Identity: System Objects / Administrator (Local)' and 'Secure Global Desktop Server: sgd-server-a1.example.com'. Navigation links for 'VERSION', 'PREFERENCES', 'LOG OUT', and 'HELP' are also present.

The main navigation area features a 'Navigation View' with a 'Jump To Object View' link. Below this is a series of tabs: 'Secure Global Desktop Servers', 'Sessions', 'User Profiles', 'Applications', 'Application Servers', 'Global Settings' (which is currently selected), and 'Caches'. Under the 'Global Settings' tab, there are sub-tabs: 'Secure Global Desktop Authentication', 'Service Objects', 'Application Authentication', 'Communication', 'Performance', 'Client Device', 'Printing', 'Security', 'Monitoring', and 'Resilience'. The 'Secure Global Desktop Authentication' sub-tab is active.

The 'Secure Global Desktop Authentication' section contains the following content:

- Tokens and Cache**
 - Token Generation: ☐ Enabled
 - Password Cache: ☒ Activated
The user name and password are stored in the password cache when checked.
-
- Secure Global Desktop Authentication Effective Sequence:**

The following list is the order in which the selected Secure Global Desktop authentication mechanisms are tried. If an authentication mechanism fails to authenticate a user, the next mechanism in the list is tried. If an authentication mechanism succeeds, no further mechanisms are tried. For each authentication mechanism, the list shows how Secure Global Desktop establishes the User Identity and the User Profile.

 1. System Authentication (performed by Secure Global Desktop):
 1. Unix Authentication: search for the User Identity in the Local Repository and use the matching User Profile.
 2. Unix Authentication: use the UNIX User Identity and search for a matching User Profile in the Local Repository using the user's Unix Group ID.

「グローバル設定」タブには、SGD を設定および管理するためのタブがほかにもいくつかあります。たとえば、「Secure Global Desktop 認証」タブでは、ユーザーが SGD に認証する方法を設定します。

Administration Console の「Secure Global Desktop サーバー」タブでは、個々の SGD サーバーを管理します。図 3-36 を参照してください。

図 3-36 「Secure Global Desktop サーバー」タブ

<div> <div>VERSION</div> <div>PREFERENCES</div> <div>LOG OUT</div> <div>HELP</div> </div> <div> <div>ORACLE</div> <div>Secure Global Desktop</div> <div>User Identity: System Objects / Administrator (Local)</div> <div>Secure Global Desktop Server: sgd-server-a1.example.com</div> </div>											
<div>Navigation View</div> <div> <div>Secure Global Desktop Servers</div> <div>Sessions</div> <div>User Profiles</div> <div>Applications</div> <div>Application Servers</div> <div>Global Settings</div> <div>Caches</div> </div>											
<div>Secure Global Desktop Servers</div> <div>Secure Global Desktop servers are machines running the Secure Global Desktop. By adding at least one other server you create an array. Using an array allows you to distribute load between its servers and increase reliability. One server in the array is the primary server which is responsible for replicating configuration data. Use the Administration Console on the primary server of the array to add additional servers to the array.</div>											
<div>Secure Global Desktop Server List (1)</div> <div> <div> <div>+</div> <div>-</div> </div> <div> <div>Add...</div> <div>Remove</div> <div>Make Primary</div> <div>Reload</div> </div> </div>											
Server	Type	Status	Start Time (BST)	Accepting Connections		User Sessions			Application Sessions		
				Standard	Secure	Standard	Secure	Total	Terminal	Graphical	Total
sgd-server-a1.example.com	Primary Server	Up	2010/06/22 13:25:53	Yes	No	1	0	1	0	0	0

「Secure Global Desktop サーバー」タブには、SGD サーバーのステータス、SGD サーバーが動作中かどうか、存在しているユーザーセッションの数、および SGD サーバーがホストしているアプリケーションセッションの数が表示されます。

「Secure Global Desktop サーバーのリスト」テーブル内の SGD サーバーの名前をクリックすると、Administration Console では、さらにいくつかのタブがオブジェクトビューに表示されます。これらのタブを使用して、選択した SGD サーバーを設定したり管理したりします。図 3-37 を参照してください。

図 3-37 SGD サーバーの「一般」タブ

<div> <div>VERSION</div> <div>PREFERENCES</div> <div>LOG OUT</div> <div>HELP</div> </div> <div> <div>ORACLE</div> <div>Secure Global Desktop</div> <div>User Identity: System Objects / Administrator (Local)</div> <div>Secure Global Desktop Server: sgd-server-a1.example.com</div> </div>											
<div>Object View</div> <div>Jump To Navigation View</div> <div>Object History: sgd-server-a1.example.com</div>											
<div> <div>General</div> <div>Security</div> <div>Performance</div> <div>Protocol Engines</div> <div>User Sessions</div> <div>Application Sessions</div> </div>											
<div>sgd-server-a1.example.com - General</div> <div> <div>Save</div> <div>Reset</div> </div>											
<div>Type: Primary Server</div>											
<div> <div>External DNS Names:</div> <div>*sgd-server-a1.example.com</div> </div>											
<div> <div>The DNS names that different client devices use to connect to this server. Syntax: <client IP>-<DNS name>. Use "*" as a wildcard in the client IP. The order of the names is important as the first matching IP pattern is used. Changes only take effect when the Secure Global Desktop server is restarted.</div> </div>											
<div> <div>User Login:</div> <div><input checked="" type="checkbox"/> Allowed</div> </div>											
<div> <div>Redirection URL:</div> <div></div> </div>											
<div> <div>The absolute URL that client devices are redirected to if server logins are disabled.</div> </div>											
<div> <div>Save</div> <div>Reset</div> </div>											

コマンド行からグローバル設定や SGD サーバーを設定するには、tarantella config コマンドを使用します。すべてのコマンド行引数の詳細は、『Oracle Secure Global Desktop 4.6 管理者ガイド』を参照してください。

アレイ

「Secure Global Desktop サーバー」タブを使用すると、いくつかの SGD サーバーをまとめて「アレイ」を形成できます。アレイとは、設定情報を共有する一連の SGD サーバーを指します。

アレイは、次のサーバーで構成されます。

- **1 台のプライマリサーバー** – このサーバーは、グローバルな SGD 情報の権限を持つソースであり、組織階層の最終的なコピーを管理します。
- **1 台以上のセカンダリサーバー** – これらのサーバーには、プライマリサーバーによって情報が複製されます。

1 台のスタンドアロンサーバーは、セカンダリサーバーがないアレイ内のプライマリサーバーと見なされます。

アレイ内の SGD サーバーでは、異なるオペレーティングシステムを実行できます。ただし、アレイのすべてのメンバーが、同じバージョンの SGD を実行する必要があります。

SGD の評価期間中は、2 台以内の SGD サーバーを含むアレイに制限されます。ライセンスキーをインストールすると、この制限はなくなります。

アレイには、次のような利点があります。

- ユーザーセッションとアプリケーションセッションが、アレイ全体で負荷分散されます。ユーザー数を増やすには、アレイにさらに多くの SGD サーバーを追加するだけです。
- 複数のサーバーを使うので、シングルポイント障害がなくなります。ユーザーへの影響を最低限に抑えて、サーバーを一時的に運用停止することができます。
- 組織階層内のすべてのオブジェクトを含む設定情報が、アレイのメンバーすべてに複製されます。アレイのすべてのメンバーが、すべての情報にアクセスすることができます。

どの SGD サーバーにログインした場合でも、同じ Webtop が表示され、ユーザーはアプリケーションを再開することができます。

SGD サーバーをアレイに追加するには、「Secure Global Desktop サーバーのリスト」テーブルの「追加」をクリックします。

ユーザーの監視

進行中のユーザーセッションとアプリケーションセッションを監視することにより、ユーザーが行なっていることを追跡できます。ユーザーセッションおよびアプリケーションセッションは、常にユーザー識別情報およびユーザープロファイルに関連付け

られます。ユーザー識別情報は、ユーザーの一意の認証された識別情報です。ユーザープロフィールは、ユーザーの設定を含む SGD ユーザープロフィールオブジェクトです。

ユーザーセッション

ユーザーセッションは、ユーザーが SGD にログインした時点で始まり、ユーザーがログアウトした時点で終わります。ユーザーセッションは、ユーザーがログインした SGD サーバーによってホストされます。ユーザーセッションには、標準セッションまたはセキュアセッションを使用できます。セキュアセッションが使用可能なのは、SGD セキュリティサービスが有効になっている場合だけです。

すでにユーザーセッションが開かれている場合にユーザーがログインすると、ユーザーセッションは新しい SGD サーバーに転送され、古いセッションは終了します。これは、セッションの乗っ取りまたはセッションの移動と呼ばれることがあります。

Administration Console では、次の手順でユーザーセッションを一覧表示できます。

- ナビゲーションビューの「セッション」タブには、アレイ内のすべての SGD サーバーで実行されているすべてのユーザーセッションが表示されます。
- SGD サーバーの「ユーザーセッション」タブには、そのサーバーでホストされているすべてのユーザーセッションが表示されます。
- ユーザープロフィールの「ユーザーセッション」タブには、そのユーザープロフィールに関連付けられているすべてのユーザーセッションが表示されます。

「セッション」タブと「ユーザーセッション」タブでは、ユーザーセッションを選択して終了させることができます。「ユーザーセッション」タブでは、クライアントデバイスに関して SGD Client で検出された情報など、ユーザーセッションの詳細を表示できます。

コマンド行からユーザーセッションを一覧表示したり終了したりするには、`tarantella webtopsession` コマンドを使用します。

アプリケーションセッション

アプリケーションセッションは、ユーザーがアプリケーションを起動した時点で始まり、アプリケーションを終了した時点で終わります。各アプリケーションセッションは、SGD を使って実行中のアプリケーションの 1 つに、それぞれ対応しています。アプリケーションセッションは、実行中であることも、中断していることもあります。

アプリケーションセッションは、アレイ内の SGD サーバーのいずれでもホストできます。ユーザーがログインしたのと同じ SGD サーバーではない場合もあります。

Administration Console では、次の手順でアプリケーションセッションを一覧表示できます。

- SGD サーバーの「アプリケーションセッション」タブには、そのサーバーでホストされているすべてのアプリケーションセッションが表示されます。
- ユーザープロファイルの「アプリケーションセッション」タブには、そのユーザープロファイルに関連付けられているすべてのアプリケーションセッションが表示されます。
- アプリケーションサーバーの「アプリケーションセッション」タブには、そのアプリケーションサーバーで実行されているすべてのアプリケーションが表示されます。

「アプリケーションセッション」タブでは、アプリケーションセッションの詳細を表示できます。また、アプリケーションセッションを終了したりシャドウイングしたりすることもできます。シャドウイングを使用すると、管理者とユーザーは同じアプリケーションを同時に使って対話することができます。

注 - シャドウイングできるのは、Windows アプリケーションと X アプリケーションだけです。また、アプリケーションセッションを中断してはいけません。

アプリケーションセッションをシャドウイングする方法については、[58 ページの「ユーザーのアプリケーションセッションをシャドウイングする方法」](#)を参照してください。

コマンド行からアプリケーションセッションを一覧表示、終了、シャドウイングするには、`tarantella emulatorsession` コマンドを使用します。

▼ ユーザーのアプリケーションセッションをシャドウイングする方法

アプリケーションで問題が発生している場合は、Administration Console を使用してユーザーのアプリケーションセッションを検出したあと、そのセッションをシャドウイングすることができます。

1. ユーザーのアプリケーションセッションを検出します。

Administration Console で、次のいずれかを行います。

- ユーザープロファイルオブジェクトの「アプリケーションセッション」タブに移動します。

このタブには、ユーザーのアプリケーションセッションが一覧表示されます。

- アプリケーションオブジェクトの「アプリケーションセッション」タブに移動します。

このタブには、現在そのアプリケーションを実行しているユーザーが一覧表示されます。

2. 「アプリケーションセッションリスト」テーブル内のアプリケーションセッションを選択します。

3. アプリケーションセッションのシャドウイングを開始します。

「シャドウイング」ボタンをクリックします。

ユーザーの画面に、セッションのシャドウイングを許可するかどうかを確認するダイアログボックスが表示されます。ユーザーが同意すると、管理者の画面に新しいウィンドウが開き、実行中のアプリケーションが表示されます。管理者とユーザーの双方が、マウスポインタを操作したりアプリケーションを使用したりできます。

4. ユーザーの問題を修正したあと、アプリケーションセッションのシャドウイングを終了します。

シャドウイングウィンドウを閉じても、アプリケーションは閉じません。

ユーザーの画面に、現在このセッションをだれもシャドウイングしていないことを示すダイアログボックスが表示されます。

SGD の制御

コマンド行から SGD を制御するには、`tarantella start`、`tarantella stop`、および `tarantella restart` コマンドを使用します。

SGD サーバーと SGD Web サーバーを制御するには、次のコマンドを使用します。

- `tarantella start` – SGD Web サーバーと SGD サーバーを起動します
- `tarantella stop` – SGD Web サーバーと SGD サーバーを停止します
- `tarantella restart` – SGD Web サーバーと SGD サーバーをいったん停止してから再起動します

`tarantella start`、`tarantella stop`、および `tarantella restart` コマンドのサブコマンドを使用すると、次のように SGD の個々のコンポーネントを制御できます。

- `sgd` サブコマンドは、SGD サーバーを制御します。次の例では、ホスト上で、印刷サービスを含む SGD サービスを起動します。

```
# tarantella start sgd
```

- `webserver` サブコマンドは、SGD Web サーバーを制御します。次の例では、SGD Web サーバーをいったん停止してから再起動します。

```
# tarantella restart webserver
```

tarantella stop、tarantella start、および tarantella restart コマンドに使用できるサブコマンドとオプションの詳細は、『Oracle Secure Global Desktop 4.6 管理者ガイド』を参照してください。

SGD 拡張モジュールの制御

この節では、SGD 拡張モジュールの制御方法について説明します。

Microsoft Windows 対応 SGD 拡張モジュールの制御

Microsoft Windows 対応 SGD 拡張モジュールをインストールすると、負荷分散サービスがただちに開始されます。負荷分散サービスは、Windows ホストがリブートされたときにも自動的に開始されます。

▼ 負荷分散サービスを手動で制御する方法

Windows ホスト上の負荷分散サービスの停止と開始を手動で行うには、次の手順を使用します。

1. 管理者特権を持つユーザーで Windows ホストにログインします。
2. Windows の「コントロール パネル」で「管理ツール」をクリックします。
3. 「コンピュータの管理」をクリックします。
4. ツリーで「サービスとアプリケーション」を展開します。
5. 「サービス」をクリックします。
6. 「Tarantella Load Balancing Service」をダブルクリックします。
7. 「停止」または「開始」をクリックして、サービスを停止または開始します。

UNIX および Linux プラットフォーム対応 SGD 拡張モジュールの制御

UNIX および Linux プラットフォーム対応 SGD 拡張モジュールをインストールすると、負荷分散および UNIX オーディオのプロセスがただちに開始されます。クライアントドライバマッピングのプロセスは追加の設定を必要とするため、手動で開始する必要があります。

ホストがリブートされるたびに、拡張モジュールのすべてのプロセスが自動的に開始されます。

UNIX プラットフォームと Linux プラットフォームでは、`tem` コマンドを使用して拡張モジュールのプロセスを手動で制御できます。`tem` コマンドは、`install-dir/bin` ディレクトリにインストールされるスクリプトです。デフォルトでは、`install-dir` は `/opt/tta_tem` です。このスクリプトは標準 `PATH` 上に存在しないため、このコマンドを実行するたびにフルパスを指定するか、コマンドを実行する前に `/opt/tta_tem/bin` ディレクトリに移動する必要があります。あるいは、次の操作を行います。

- `/opt/tta_tem/bin` を `PATH` に追加します。次に例を示します。

```
PATH=$PATH:/opt/tta_tem/bin; export PATH
```

- エイリアスを作成します。次に例を示します。

```
alias em=/opt/tta_tem/bin/tem
```

拡張モジュールのプロセスを手動で制御するには、次のコマンドをスーパーユーザー (`root`) で実行します。

- `tem start` – 負荷分散のプロセスを開始します
- `tem stop` – 負荷分散のプロセスを停止します
- `tem startcdm` – CDM のプロセスを起動します
- `tem stopcdm` – CDM のプロセスを停止します
- `tem startaudio` – UNIX プラットフォームオーディオのプロセスを開始します
- `tem stopaudio` – UNIX プラットフォームオーディオのプロセスを停止します

拡張モジュールの各種モジュールのステータスを表示するには、`tem status` コマンドを使用します。

SGD ネットワークアーキテクチャー

SGD は、次の層から構成される 3 層ネットワークアーキテクチャーモデルを中核にして構築されています。

- クライアントデバイス
- SGD サーバー
- アプリケーションサーバー

同一ホスト上に複数の層を常駐させることができます。たとえば、1 台の UNIX プラットフォームのホストで、SGD サーバーおよびアプリケーションサーバーの両方を稼働できます。ただし、層は論理的に独立させておく必要があります。

クライアントデバイス

第 1 層には、「クライアントデバイス」があります。クライアントデバイスは 1 台のハードウェアであり、ブラウザと SGD Client を使って SGD と通信できます。

ブラウザは、第 2 層の SGD Web サーバーと通信し、ユーザーに対して Webtop を表示します。

SGD Client は、第 2 層の SGD サーバーと通信し、ユーザーが実行するアプリケーションを表示します。

Adaptive Internet Protocol (AIP) は、第 1 層と第 2 層の間でネットワークを最適に利用できるようにします。

SGD サーバー

第 2 層には、「SGD サーバー」があり、第 1 層と第 3 層の間のゲートウェイとして機能します。この層は、1 台の SGD サーバーで構成されているか、アレイを形成するように設定された複数の SGD サーバーで構成されています。

SGD サーバーは次の処理を行います。

- ユーザーが SGD にログインする際に、ユーザーを認証する
- ユーザーがアプリケーションを起動する際に、アプリケーションサーバーとネゴシエートしてユーザーを認証し、必要に応じてパスワードの入力を要求する
- アプリケーションを表示するように SGD Client に要求する
- ユーザーがログアウトしたあとも実行されているアプリケーションを追跡し、あとで再開できるようにする

アプリケーションサーバー

第 3 層には、「アプリケーションサーバー」があり、ユーザーのアプリケーションを実行します。

ユーザーが Webtop 上のリンクをクリックすると、SGD は該当するアプリケーションサーバー上でアプリケーションを起動します。アプリケーションからの出力は、SGD サーバーによって、アプリケーションサーバーからクライアントデバイスにリダイレクトされます。

アプリケーションに関して SGD を設定する場合、そのアプリケーションを実行できるすべてのアプリケーションサーバーに関する情報を入力します。SGD はアプリケーションサーバー間で負荷を分散します。

次の作業

この節では、SGD ユーザーに通知する必要がある内容と、オンラインドキュメントを表示する方法について説明します。

ユーザーに通知する必要がある内容

次の情報は、SGD を使う人に役立つ重要な情報です。

- SGD にログインする方法。

ユーザーは、ログイン URL を知っている必要があります。

`http://server.example.com/sgd` を使用します。ここで、`server.example.com` は SGD サーバーの名前です。

ユーザーは、SGD にログインするために入力するユーザー名とパスワードを知っている必要があります。

SGD では、ユーザー認証用の複数の機構がサポートされます。ユーザー名とパスワードは、使用可能な認証機構によって変わります。デフォルトでは、ユーザーの UNIX または Linux システムのユーザー名とパスワードを使ってログインできます。

Java テクノロジを使用していない組織では、**SGD Client** を手動でダウンロードしてインストールする方法をユーザーに示す必要があります。詳細については、[9 ページの「SGD Client の手動インストール」](#)を参照してください。

- アプリケーションを実行する方法。

ユーザーは、アプリケーションを起動および停止する方法を知っている必要があります。

ユーザーが SGD を介してアクセスできるアプリケーションは、多数の異なるアプリケーションサーバーで実行される場合があります。ユーザーがリンクをクリックしてアプリケーションを起動すると、SGD がアプリケーションサーバーのユーザー名とパスワードの入力を要求する場合があります。ユーザーは、使用するユーザー名とパスワードを知っている必要があります。

- ヘルプの入手場所。

どのユーザーの Webtop 上にも、『Oracle Secure Global Desktop 4.6 ユーザーガイド』へのリンクがあります。「ヘルプ」をクリックします。

詳細ヘルプの入手場所

Webtop 上で「ヘルプ」をクリックすると、『*Oracle Secure Global Desktop 4.6 管理者ガイド*』が表示されます。これは、SGD を設定および実行するためのオンラインマニュアルです。Administration Console では、オンラインヘルプも利用できます。

また、次の場所から HTML (Hypertext Markup Language) 形式と PDF (Portable Document Format) 形式のマニュアルも入手できます。

- <http://server.example.com>。ここで、*server.example.com* は SGD サーバーの名前です
- <http://docs.sun.com/app/docs/coll/1706.5>

次の場所にある SGD フォーラムで、技術的な問題について話し合うこともできます。
<http://forum.java.sun.com/forum.jspa?forumID=815>

第4章

SGD の削除

この章では、Oracle Secure Global Desktop (SGD) の削除方法について説明します。

SGD の削除

SGD を削除するには、ホスト上、アプリケーションサーバー上、およびクライアントデバイス上にインストールされているコンポーネントを削除します。

▼ SGD を削除する方法

SGD サーバーがアレイのメンバーである場合は、SGD サーバーをアレイから削除します。それを行うには、`tarantella array` コマンドを使用します。

1. SGD ホストにスーパーユーザー (root) としてログインします。
2. SGD を削除します。

```
# tarantella uninstall --purge
```



注意 - SGD のサポートされている削除方法は、`tarantella uninstall` コマンドだけです。このコマンドは、SGD のプロセスをすべて停止してから、ソフトウェアを削除します。`pkgmgr` や `rpm` コマンドを使用して、SGD を直接削除しないようにしてください。

▼ Microsoft Windows 対応 SGD 拡張モジュールを削除する方法

1. 管理者特権を持つユーザーで Windows ホストにログインします。
2. Windows の「コントロール パネル」で「プログラムの追加と削除」を選択します。
3. 「Windows 対応 Secure Global Desktop 拡張モジュール」を選択します。
4. 「削除」をクリックします。

▼ UNIX® および Linux プラットフォーム対応 SGD 拡張モジュールを削除する方法

1. スーパーユーザー (root) としてアプリケーションサーバーにログインします。
2. 拡張モジュールを削除します。

ソフトウェアを削除する前に、次のコマンドを使用してすべての拡張モジュールプロセスを停止します。

Solaris™ オペレーティングシステム (Solaris OS) プラットフォームの場合：

```
# pkgrm tem
```

Linux プラットフォームの場合：

```
# rpm -e tem
```

注 - 拡張モジュールのインストールディレクトリと、このディレクトリ内の一部の構成ファイルは削除されません。拡張モジュールのデフォルトのインストールディレクトリは /opt/tta_tem です。

▼ Microsoft Windows プラットフォームで SGD Client を削除する方法 (手動インストール)

SGD Client を手動でインストールした場合にだけ、ここで説明する手順に従ってください。

1. Windows の「コントロール パネル」で「プログラムの追加と削除」を選択します。
2. 「Oracle Secure Global Desktop Client」を選択します。

3. 「削除」をクリックします。

▼ Microsoft Windows プラットフォームで SGD Client を削除する方法 (自動インストール)

SGD Client を自動的にインストールした場合にだけ、ここで説明する手順に従ってください。

- **SGD Client プログラムを削除します。**

ユーザーのホームフォルダから SGD Client プログラムを削除します。通常、これは `C:\Documents and Settings\username\Local Settings\Temp\tcc\version` フォルダです。

SGD Client プログラムは `tcc.exe` です。

▼ UNIX 、 Linux 、 および Mac OS X プラットフォームで SGD Client を削除する方法

- **SGD Client プログラムを削除します。**

SGD Client プログラムがインストールされている場所から、このプログラムを削除します。通常、これは `$HOME/.tarantella/tcc/version` ディレクトリか `$HOME/bin` ディレクトリです。

SGD Client プログラムは `ttatcc` です。

